魔法少女リリカルなのはAnother　カオスなおもちゃ箱

外神 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＡｎｏｔｈｅｒ　カオスなおもちゃ箱

【Ｎコード】

Ｎ３２８８Ｎ

【作者名】

外神　恭介

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはＡｎｏｔｈｅｒの、短編やクロスものの置き場。基本的に色々ブレイクしててカオスなので注意。あと時間軸は気にしたら負け。※Ａｎｏｔｈｅｒのネタバレ（笑）を含むので、Ａｎｏｔｈｅｒを読んでから来るか「ネタバレなんざ知らん」と開き直ってから読むことをオススメ。

前編「天使、撃墜」（前書き）

お久しぶりです。二か月ぶりに戻ってきましたロリコンです。
今までとは打って変わって？このシリーズはちょっと重めの雰囲気です。
それを覚悟して幼女万歳と三回叫んでから読むことをオススメします←オイ
ではどーぞー

前編「天使、撃墜」

———最近、体が重い。
動けない訳じゃないけど、疲れていないとは言い切れないし、絶好調って訳でもない。ちょっとだるいかなって、そんな程度。
だけど、休む訳にはいかない。管理局は人手不足だし、ナツキ君が頑張っているのに私だけ休む訳にはいかないから。
だから私は、今日もレイジングハートと一緒に空を翔ける。ナツキ君が心配しないように、重い体を動かして。
これ以上ナツキ君に、負担を掛けたくないから———

「っと、これで終わりか」

右手に構えた身の丈を越える、白銀の大太刀が薙いだ軌跡に何も残っていないことを確認しながら、一人の少年が声を漏らした。漆黒の髪とロングコートが特徴的な十二歳くらいの彼、天城ナツキは上空を仰ぎ、空を飛び回っているであろう少女に精神リンクを繋ぐ。

『ヴィータ、そっちはどうだ？』

『問題ねぇよ。敵影もねぇし任務完了だ』

頭の中に響く、気の強そうな少女の声。彼が管理局で働くようになってからよく共同で任務に当たっている鉄槌の騎士、ヴィータの声だ。

「んじゃぼちぼち撤収かね。なのは、大丈夫か？」

「…あ、うん。大丈夫」

終了の報を受けたナツキはぼーっと空を見上げていた傍らの少女、栗色の髪に制服のような白い服を纏い、杖を両手で握った少女に声を掛けた。なのはと呼ばれた彼女は頬を緩めながら、歩き始めたナツキの後ろをとことこと付いて行く。

「よっと。お疲れ様」

「お前もな」

空からふわりと降り立った少女が、笑みと共にナツキとハイタッチを交わす。ゴスロリ風の紅いドレスを身に纏い、ハンマーを携え紅い髪をしたその少女は先程、彼が念話で話していたヴィータその人だ。

「事後処理はやっとくから先に帰って休んでろ」

「え？でも…」

帰還用の転移魔法陣を展開しながらのナツキの言葉に、なのはが思わずと言った感じで口を挟む。が、

「書類捌くのはそこそこ出来るからな。ユキに頼まれてた調べ物に比べれば楽勝楽勝」

苦笑するような彼の笑顔を見て、それ以上何も言えなくなる。

「…それじゃあ、お願い」

「悪いな…」

「気にすんな」

そんな会話を交わしながら、三人の魔導師は銀色の光と共に姿を消した。

———周囲の人間に被害を及ぼす凶悪な原生生物、大型の狼の死骸だけを大量に残して。

「はぁ…」

書類を片付け帰宅した俺がまず取った行動は、ベットに倒れ込むことだった。疲れていないと言えば嘘になるが、かといって立てない程と言う訳でもない。どちらかと言うと気分の問題だ。

「お兄ちゃん、お疲れ様」

と、俺の帰宅を嗅ぎ付けたのか、一人の少女が部屋に入って来た。金色の髪をツインテールにした、赤い瞳の少女。俺にとって妹のような存在である、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンだ。

「おー、フェイトも仕事終わったのか」

「うん、今さっき」

起き上がった俺の隣に座り込んだ彼女の頭を撫でながら疑問を投げ

掛けると、フェイトは表情を緩めて寄り掛かりながら質問に短く答えた。見た目小学五年生程度の彼女も俺達同様、ちょっと特殊な仕事をしている。

「…お兄ちゃん、大丈夫？」

どうでもいいことをぼーっと考えていると、フェイトが俺の顔を覗き込んでいることに気が付いた。その瞳に映った俺の顔は、少し疲れているようにも見える。…まぁ、死んでも言わないけど。

「シャワー浴びたら少し寝るよ。何かあったら起こしてくれ」

「うん。わかった」

快諾してくれたフェイトの頭を撫で、着替えを纏めながら部屋を出る。飯は…、面倒だから起きてからでいいか。

確かに疲労もあるし大変な仕事だが、俺達は充実した毎日を送れている。仲のいい友人と同じ学校、同じ職場で過ごすことが出来ている。

———願わくは、こんな日々がずっと続きますように。

———魔法の、力。

私達の世界、地球ではまだ知られていないものの、他に存在するいくつもの世界では、魔法と言う非現実的な力は日常の一部になっている。そんな夢のような力を扱う人間は魔導師と呼ばれ、数多ある世界を束ねる時空管理局に所属或いは登録されている。私やなのは

ちゃん、フェイトちゃんにヴィータ、ナツキ君もそこに所属しており、様々な任務をこなしていたりする。まだ小学生と言うことで余り大きな仕事には携われないが、みんな将来的には管理局に就職するつもりだ。ヴィータはちょっと事情が特殊な為、既に管理局勤めの魔導師として扱われている。…見た目は八歳くらいなのにな。少し話が脱線したが要約すると、私こと八神はやても魔法が扱えるとは言え、所詮は一介の少女に過ぎない。あと三ヶ月程で小学六年生になる、ただの女の子に過ぎないのだ。

「なのにこれはないやろ…」

デスクにグタッと寝そべりながら、目の前の山を見上げる。右を見ても左を見ても、そこには書類が築き上げた山しかない。カップの紅茶に反射して映った私の顔にはどよーんとしたオーラが漂っており、心なしか茶色のショートカットやナツキ君に貰ったヘアピンが色褪せているような気がした。

「はやてー、手ぇ止まってるわよー」

と、向かい側のデスクに腰掛けた少女が、私に作業の再開を促してくる。銀色のロングヘアーに赤い瞳、フェイトちゃんにそっくりな外見を持つ彼女は天城ユキ。姓からわかるようにナツキ君の実妹で、仕事やちょっとした事情絡みで私とよく一緒にいる少女だ。

「小学生に山のような書類を整理させる職場がどこにあんねん！！」

誰か！！誰か管理局に労働基準法を！！

「ここにあるじゃない実際。それに、小学生を働かせてくれる職場自体普通ないわよ」

「うぐ…」

書類をサクサクと片付けながらのツッコミの言葉に、思わず口を閉ざす。…よくよく考えたら、労働基準法を導入したら私達みんなクビやん。

「でもいくら人手不足やからって、新米にこのボリュームはないやろ…」

天城兄妹みたいな天才児やフェイトちゃんみたいな生粋の魔導師と違って、私は一番魔法との関わりが短い。復学のお陰で徐々に知識を増やしているとは言え、私にこの分量は無理やわ…。

「二年もやってりゃ新米とは言えないでしょ。ほら、手伝ってあげるから頑張りなさい」

「…おおきにな」

私の書類をごっそりと持って行きながら、手を機械のように動かすユキちゃん。…おかしいなぁ、私の倍くらいあった書類が既に片付いてるように見えるわ…。私は三割も終わってへんのに…。

「そういえばはやて、リインフォースの調子は？」

ぼんやりとそんなことを考えていると、ユキちゃんが質問を投げ掛けて来た。一緒にいるちょっとした理由の中心人物と、普段の行動パターンを頭の中で整理する。

「ん、元気にやっとるよ。問題なしや」

「そう」

今頃シャマルと一緒に料理をしているであろう銀髪の少女を脳裏に思い描きながら、私はニコニコと答える。ユキちゃんは短く、だけど安心したように頷き、お互い作業を再開した。

『はやてさん、ユキさん、ちょっといいかしら？』

「あれ？リンディさん？」

それからしばらくして書類があらかた片付いた頃、目の前にウィンドウが展開された。そこに映っていたのは私達が幾度となくお世話になった女性、リンディ・ハラオウンだ。

『ちょっと困った事態になっててね…。至急ナツキ君とヴィータさん、それからなのはさんに連絡を取って欲しいの』

「…それで、一体どうしたんですか？」

急遽呼び集められた私達はソファに並んで腰掛けて、向かい側に座る女性に視線を移す。青いスーツを着こなし、緑色の髪をポニーテールにした女性、リンディ・ハラオウン。フェイトちゃんのお母さんであり、時空管理局の元提督である彼女の沈痛な表情からは、何やら嫌な予感を感じさせる。

「ええ、これを見て欲しいの」

そう言ってリンディさんは、光輝くウィンドウをいくつか展開する。

そこに映し出されたのは、

———伽藍の、廃墟。

「ひでぇな…」

「人っ子一人いないみたい…」

薄く雪の降り積もった小さな廃墟。かつて人が住んでいたであろうその街は、これでもかと言わんばかりにボロボロだった。家は潰され建物は崩され、場所によっては更地やクレーターさえ広がっている。

「…この遺跡らしきものは全く無傷なのが気に掛かりますね」

そんな呟きを漏らしながら、ナツキ君が一つのウィンドウに触れる。そこに映った遺跡、地球のギリシャにあるパルテノン神殿によく似た建造物には、確かに傷一つなかった。

「…さすがナツキ君、鋭いわね」

そんなナツキ君に苦笑いしながら、リンディさんが新しくウィンドウを展開する。テキスト形式のその文章のタイトルは…、

「…ロストロギア発掘？」

「ええ、その通りよ」

ヴィータちゃんの疑問に答えながら、リンディさんが概要を話し始める。

「先日、無人世界であるここの遺跡を調査していたとある研究グループが、ロストロギアらしきものを発見したの」

ロストロギア。古代の遺産。強大な魔力や革新的な技術で生み出された魔法道具。それだけで世界や歴史さえ変えられるような、危険な遺失物。

「…だから管理局（俺達）にお鉢が回って来たって訳ですか」

「ご明察。あなた達三人にはそのロストロギアの確保に向かって欲しいの」

そんな危険なモノの確保と聞いて、思わず緊張して体が固まる。ジュエルシードや闇の書などに関わって来たとは言え、やはり怖さや恐ろしさは拭えない。

「と言ってもまぁ大丈夫よ。今回のは「抜け殻」らしいから」

が、リンディさんは一転して楽天的な笑みを浮かべた。思わず私とヴィータちゃんがずっこける。

「…「抜け殻」っていうのは？」

そんな私達に苦笑いしながら、ナツキ君がリンディさんに尋ねた。抜け殻…、ロストロギアが脱皮したのかな？

「抜け殻と言っても、少なくとも脱皮した訳ではないわよ？」

「うぐっ」

私の思考を読んだかのようなピンポイントな言葉に、思わず胸を押さえてよろめく。な、何故ばれたの…。

「力を使い果たして機能を停止しているから「抜け殻」よ。役目を終えた後祀られていたらしいんだけど、念の為管理して欲しいって」

「なるほど…」

古代エジプトではピラミッドという巨大な墓を建て、王が死んだ後も崇め奉ったと言われている。強力なロストロギアな上同じ人間なんだから、似たようなことをしていてもおかしくはない。

「ついでにその辺り、縄張り意識の強い原生生物がいるらしいから油断しないようにね」

「…俺達は保健所の職員ですか」

リンディさんの付け足した言葉に、ナツキ君が苦笑い。前回といい今回といい、やたら動物に縁がある気がする。可愛い動物さんならともかく、敵意を向けられるのはちょっと悲しい。

「ナツキ君がいれば大抵のことはなんとかなるだろうし、あなた達最近根詰め過ぎだからこの簡単な任務でガス抜きして来なさい」

「…ありがとうございます」

ふと表情を緩めそんなことを付け足したリンディさんに、ナツキ君が頭を下げる。ＡＡＡ相当が二人にＳランクの三人組、という凄まじい能力を保有している私達は自然と難易度の高い任務を任される

為、疲労の度合いも高いのだ。

「んじゃ、さっさと行こうぜ。その後思う存分まったりすればいいんだし」

ウィンドウを消して立ち上がったナツキ君が、苦笑と共に私達を促す。ヴィータちゃんと一緒に頭を下げ、私はナツキ君の後を歩き始めた。

――――立ち上がる瞬間に感じた、奇妙な眩暈に気付かないふりをして。

「…ここか」

魔法陣の光が消え、目の前に広がった光景にあたしは確認するように呟く。先程見た資料と同じ遺跡は思ったより小さく、はやて達が通ってる学校より少し小さいくらいだった。中でアイゼン振り回せっかな…。

「見た感じ作られたのは精々数百年前程度か…」

《Ｍａｙｂｅ（そのようだな）》

ナツキはその壁に触れながら、何やらアクセルと会話している。別にそんなん調べるのはユーノとか他の連中に任せればいいのに。

「…っ！？ナツキ君！！」

と、ふと背後を振り返ったなのはが悲鳴のような声を上げる。あたしとナツキがそっちに視線を移すと、

「…来て早々に鉢合わせかよ」

熊と狼を足して割ったような大型の原生生物が、群であたし達を囲んでいるところだった。思いっ切りこっちを睨んでいる以上、逃げ切るのは難しいだろう。

「幸い戦闘能力はそこまで高くない。互いにフォローしながら応戦、ある程度倒したら遺跡内部に突入する。いいな？」

「「了解！！」」

ナツキの指示に頷き、あたし達はデバイスを構える。闇の書の時もそうだったが、ナツキには戦闘時に置けるカリスマのようなものがある。状況に応じた最適解を弾き出し、その結果へたどり着く為の行動に周りさえも巻き込んでいく旋風のような力が。それを知っている為か、自然と任務時はナツキが仕切ることになっていた。ナツキ自身は「柄じゃねぇよ」と言っていたが、事実なんだから仕方ない。

「アイゼン！！」

《Ｊａｗｏｈｌ！！（了解！！）》

手中のハンマー（相棒）に声を掛け、あたしは真っ先に飛び出した。身体を回転させ遠心力の乗ったアイゼンを、

「うおらあああああっ！！」

――全力で振り抜く！！

「容赦ねぇなぁ…」

あたしのホームランで星とは言わないまでも、点になった原生生物にナツキが哀れみの視線を送る。…殺さずに済ませたんだからいいだろ、別に。

「ま、とりあえずだ」

《Ｚｗｅｉ　Ｆｏｒｍ》

気を取り直したナツキが左手を翳すと同時、もう一本の銀刀が原生生物の牙を防ぐ。ぎりぎりだったのに平然としてんなぁ…。

「しばらく寝てろ」

冷たく呟くと同時、重力制御で加速した右足が原生生物の体をくの字に折った。勢いそのままに吹き飛ばされた原生生物は、群の中央に落下する。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

「ショット！！」

アクセルとナツキの声がシンクロすると同時、周囲に展開された数十の弾丸が一斉に放たれた。複雑な軌道を宙に描くそれは、しかし確実に原生生物の顎をアッパーカット気味に穿っていく。

「レイジングハート！！」

《Ａｌｌ　Ｒｉｇｈｔ，Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

が、なのはも負けてはいない。レイジングハートに指示すると同時、二百近い弾丸を周囲に生成する。天城一族最高の天才と称されるユキの指導の賜物か、今のなのはは戦闘時に数百、周囲への警戒を無視した場合千近くの弾丸を操れるようになっていた。

「シュート！！」

なのはが発射を命じた瞬間、視界が桜色に染まった。主人（マスター）の意志に答えた弾丸が荒れ狂う暴風のように、原生生物を片っ端から薙ぎ払っていく。

「…あたしらいらなくね？」

「そーでもないだ、ろっ！！」

そんな光景に近接特化のあたし達は愚痴を漏らしつつ、なのはに近付く原生生物をぶっ飛ばしていく。さながらそれは、なのは（女王）を守る騎士のようだ。

「さーって、俺もそろそろやっとくか！！」

ナツキが威勢よく吠えた瞬間、一本に戻った刃の背部カバーがスライド。銀色の弾丸を排出し、手にした刃に黒色の光が渦巻き始めた。世界を統べる重力の力が、彼の意志に答え集束していく。

――――仲間に仇なす存在を、倒す為に！！

「蜃気一閃！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｚａｍｂｅｒ》

黒いオーラを纏い肥大化した銀刀を横薙ぎに振るった瞬間、原生生物達が一気に吹き飛ばされる。巨大な刃の腹を当てて飛ばしたのだと気付いた時には、相手はもう数十メートルも先の森に落下していた。

「そろそろ突入するぞ！！」

「あ、ああ！！」

「うん！！」

そんな光景をぽかんと眺めていたあたし達は、原因（ナツキ）の張本人に声を掛けられ我に返った。あくまで今回の目的はこいつらの撃退ではなくロストロギアの確保だ。ぼーっとしていたらまたあいつらとの戦闘で時間を浪費してしまう。

「最後に…、おらぁっ！！」

ナツキが振り返り様大地にアクセルを叩き付けると同時、地面に走った亀裂が原生生物達を呑み込んだ。あるものは足を取られ、あるものは顔面から転び、あるものは風圧で吹き飛ばされ、その悉くが追撃断念を余儀なくされる。

「よし、行くぞ！！」

その光景を確認し追っ手の危険はないと判断したナツキが、先陣を切って遺跡の廊下を駆け出す。あたし達も遅れまいと慌てて後を追った。

「…呆気ねぇな」

それから数分後、遺跡を抜けた先の小高い丘のような場所に出た私達は、目的の物を見付けた。既に研究グループが内部を探索していたせいかトラップの類もなく、拍子抜けするくらい簡単に突破することが出来た。いつしか降り始めていた雪の積もった丘の頂上、そこに作られた祭壇に祀られていたのは小さな箱。一見するとオルゴールのようにも見えるそれは、確かに言い知れないオーラのようなものを放っていた。抜け殻でもロストロギアはロストロギア、ということだろう。

「つってもショボいなこれ」

「第一級捜索指定ロストロギア、夜天の書の一部たるお前からすれば大概のロスト(遺失物)ロギアは小物だろうさ」

ジロジロと小箱を眺め回し不躾な言葉を漏らすヴィータちゃんに苦笑しながら、ナツキ君が左手を翳す。それと同時、小箱が突如現れた黒い渦に呑み込まれた。重力、引いては空間に干渉出来るナツキ君が、小箱を異相空間に収納したのだ。相手は仮にも元ロストロギア、下手に触れたら何が起きるかわからない。その点でナツキ君のこのスキルは正に適役、狙ったかのようにピッタリだった。

「おし、引き上げるか」

グラーフアイゼンを肩に担ぎ、ヴィータちゃんが祭壇から飛び降りた。続くように階段を降りたナツキ君が、有事に備え離れて待機していた私の方に歩いて来る。

———だが、不意に彼の歩みが止まった。

「「……？」」

首を傾げる私達を気にも留めず、ナツキ君は鋭い視線で周囲を見回している。…どうしたのかな？

「おい、ナツキ…」

「っ！？なのは！！ヴィータ！！」

不審に思ったヴィータちゃんが声を掛けようとした瞬間、遮るようにナツキ君が短く叫ぶ。

「「……っ！？」」

その意味を尋ねようとしたと同時、私達も遅れて気が付いた。

———ナニカが、いる。

まるで祭壇を監視するかのように、ナニカが私達を見ている。誰か、ではない。ナニカ、だ。少なくとも人間や動物など命あるものならば、こんな無機質な視線なんてありえない！！

『この視線が何かは知らんが、目的の物は回収した！！さっさと撤

収するぞ！！』

『『了解！！』』

こんな状況下でも冷静さを失わないナツキ君の声が、私達の脳裏に響く。盗聴を警戒して念話で指示を飛ばして来た彼に二人で答え、動き出そうとした瞬間、

———ぞぶり。

あえて形容するならそんな感じの、鈍く濁った音が響く。

（何だろう…）

それについて考えようとすると同時、もう一つの異変に気が付いた。

———胸が、熱い。

ナツキ君———大好きな人と一緒にいる時に感じるような、優しい温かさとは違う。例えるなら風邪を引いて熱を出した時の、悪寒を感じるそれに近い。

「なの…、は…？」

「嘘…、だろ…？」

ふと、ナツキ君とヴィータちゃんが呆然と私の胸元———奇しくも今私が感じている熱の発生源を見ていた。どうしたの二人共？まるで私が刺されたみたいな顔して。

「……あ」

そんな思考と共に視線を下ろした私は、ようやく気が付いた。

―――無機質な鋼の爪が純白のバリアジャケットを貫通し、私の胸を貫いていることに。

「あ…、え…？」

―――刺されたみたい、ではない。

―――本当に、刺されたのだ。

「なのはぁっ！！」

それを理解した瞬間、麻痺していた体が時を刻み始める。

「……ごふっ」

思い出したように血を吐きながら、私は前のめりに倒れ込む。最後に私の視界に映ったのは、鮮血で赤く染まった新雪と、鎌状の爪を持つ蠍のような機械と、私に向かって駆け出した大好きな人の顔。

「―――！！―――、―――！！」

何かを必死に叫んでいるが、よく聞こえない。体の末端から感覚が抜けていくのが、何となくわかった。

「泣か…、ないで…」

残った力を振り絞り、それだけをどうにか告げる。たった五文字の言葉を伝えるのに、こんなに苦労するとは思わなかった。
これは、私の不注意のせいだから。悪いのは私で、ナツキ君は悪くないから。ナツキ君が悲しいと、私も悲しいから。ナツキ君が泣いてると、私も泣きたくなっちゃうから。

――――だから、泣かないで。

「なのはあああああああっ！！」

――――慟哭の叫びが、灰色の空に響き渡った。

前編「天使、撃墜」（後書き）

ああ…、鬱い…。鬱なんて嫌いだ…↑何故書いた
まあ今後の色々に必要とはいえ、やっぱ心苦しいなぁ…。

次回、二人がブチ切れ。事態はどんどん加速していきます。

中編「怒りと後悔」（前書き）

はい、中編です。
前回落ちましたが今回は更に落ちます。
鬱なんて嫌いだー！↑書いた人
ではどーぞー

中編「怒りと後悔」

――二年ぶり、だろうか。

あの時――ユキを目の前で殺された日、俺の中に芽生えたもう一人の俺とでも言うべきモノ。

――どこまでも冷徹で、純粋な殺意。

――自分の大切な存在を傷付けたモノに対する、業火のように燃え盛る破壊衝動。

それは確かに俺の一部で、だからこそ一度解き放たれたら、制御出来るようなものではない。
一度は押さえ込めたと思っていた。なのはとフェイトのおかげで乗り越えた、乗り越えられたと思っていた。

――だがそれは、希望的観測に過ぎない。

何故なら、それもまた俺の一部なのだから。抑えることは出来ても、完全に消し去ることなど出来はしないのだから。
ただそれは、眠っていただけ。目覚めの時まで、再び解き放たれるのを待っていただけ――

返り血もそのままに、俺は胸を貫かれた少女を地面に横たわらせる。
俺の警告か、はたまた無意識の危機回避か、幸いなのはの傷はそこまでひどくなかった。世の中の一般基準で言えば重傷だが、管理局

には三人の頼もしい味方がいる。
ありとあらゆる世界や魔法のデータが詰まった、無限書庫の司書にして俺達の友人ユーノ・スクライア。
ロストロギア、夜天の魔導書の守護騎士プログラム、どんな重傷も一瞬でほぼ確実に治療する湖の騎士シャマル。
そして、次元干渉型ロストロギアをわずか九歳で作り上げ、生死の理にさえ干渉する神の如き魔女、天城ユキ。

――三人が揃えばどんな患者でも元に戻せるとさえ唄われる、管理局最高クラスの魔導師達。

幸いにも三人中二人は俺達の友人で、ユキに至っては俺の実妹。迅速になのはを連れて帰れば、傷や後遺症一つ残さず完全に治してくれるはずだ。

――迅速に連れて帰れれば、の話だが。

ポケットからの翠色のお札――栞と言った方が近いだろうか――をなのはの胸元に貼る。鴉の濡れ羽のような漆黒の魔法陣が広がり、エメラルドグリーンの輝きが傷付いた少女を包み込んだ。
この栞はユキが俺に持たせていた、緊急用の治療符だ。小型端末に詰め込んだ為効果はそこまで高くない従来のものとは違い、ユキのそれは高性能。簡単な負傷ならすぐに治せるし、今のなのはくらいの傷でも維持魔力を全て回せば十分は持つらしい。帰ったらユキに礼言わないとなぁと、そんなことをぼんやり考える。
とりあえずなのはの負傷を先送りに出来たところで、俺はなのはを襲った敵に視線を移す。
それの第一印象は蠍だった。どこかの魔導機械だろうか、金属製の鋭角的なフォルムに六本の足が生えている。その内前の二本は歩行ではなく攻撃に特化したのか鎌のような型をしていて、

――片方は、先端が赤く染まっていた。

もちろん小洒落た装飾、という訳では断じてない。その赤は塗料などでは現せない命の色（オリジナル）。身体を巡る生命の証。

――血の色。

誰のものか？聞くまでもない。今背後に倒れている、純白の衣を纏った心優しい少女のものだ。

――壊（コロ）せ。

相手は機械、命ある生物ではない。潰しても壊しても、罪に問われることはない。器物損壊？こちらは既に一人刺されているんだ、正当防衛で説明出来る。

そんな黒い感情に囚われる俺の視界、その隅に異変を捉える。そちらに視線を移してみると、鈍色の蠍の群れが俺達を取り囲んでいるところだった。

「……面倒な」

相手はただの機械だが、不意打ちとはいえなのはを一撃で沈めるだけの力を持っていることは立証されている。バリアジャケットを軽々と貫通するあの鎌はかなり厄介だし、それが目の前に何十体も群れている。数ではこちらが圧倒的に不利な上、俺達はなのはを守りながら戦わなければならない。苦戦は必須と言えるだろう。

――普段ならば。

「…ヴィータ、手短に状況を説明する。なのはは重傷で一刻も早く治療が必要だ。符のおかげで多少は遅らせられるが十分。俺達は十分以内になのはを連れて本局まで行かなきゃならない。全力で転移しても本局エントランスが限界、そこから医務室まで走って五分。…あとはわかるな？」

「ああ…」

なのはが刺されたという非常事態（エマージェンシー）から我に返ったのか、ヴィータが低い声で短く答える。伏せていた顔を上げ、

「こんなところでダラダラ鉄屑の相手してる暇はない、ってことだろ？」

――――怒りに満ちた、獰猛な笑みを浮かべた。

「命令はただ一つ…、全てぶち壊（コロ）せ、だ」

「――――上等」

俺の命令にただ一言で応えたヴィータと共に、なのはを間にして背中合わせに立ち上がる。手に従えるのは、己の相棒（デバイス）である銀刀と鉄槌。

――――災厄を切り裂き、ぶち壊すチカラ。

「十分引く…、何秒だ？」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

柄を伸縮させ劇薬（カートリッジ）を装填（ロード）したアイゼンを構え、感情を押さえ込んだような低い声で放ったヴィータの問いに対し、

「計算するだけ無駄、だろ？」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

刃の裏のスライドカバーから銀色の弾丸を排出しつつ、俺は嘲るような答えを返す。もはや俺もヴィータも、目の前の所属不明魔導機械（ン）なんか見ていなかった。

今重要なことはただ一つ。なのはを迅速に本局まで連れて帰ること。

その為の障害は――――

「「――――秒殺だ」」

――――全て、潰（コロ）す。

《《Ｇｅｎｏｃｉｄｅ　Ｉｍｐａｃｔ》》

殺戮（ジェノサイド）。二人が手に握った愛機を振るった瞬間、まさにその名が相応しい、いや、この為だけに作られた言葉だと言っても過言ではない地獄（光景）が広がった。

大人の胴体程の大きさとなったハンマーの頭部が比例するように十メートル超の長さとなった柄を土台とし、巨人の鉄槌となる。そんな超弩級の武器を、少女が一回転しながら薙いだ。言葉にすればただそれだけだが、その後どうなったかは語るまでもない。

――――数十からなるアンノウン（アンノウン）が、一瞬で鉄の塊へと変貌した。

遠心力の働きもあり一カ所に纏められ、もはや完全に動作不能となった鉄屑は、しかし更なる地獄を見る。少年の握った刀が肥大化し、身の丈を越える大太刀へと姿を変えた。周囲から漆黒のエネルギーを取り込んだ刃は大剣のような形へと変化しながら、銀刀（白）と重力（黒）という正反対の色を取り込んだ矛盾した存在へと昇華される。

――その破壊力は、先程の鉄槌の比ではない。

少年が大剣と見間違う程巨大な大太刀を振るった瞬間、世界が震えた。星には基本的に重力が働いており、それを操るということは間接的に空間、引いては世界にさえ干渉出来るということ。普段から規格外の少年は、かつて目の前で妹を殺された少年は、仲間（なのは）を傷付けたアンノウン（鉄屑）に容赦も慈悲も与えなかった。

横に薙がれた白銀の大太刀、その軌跡上の全ての鉄塊が消滅する。膨大なエネルギーを秘めた刃に触れただけで、鉄屑はことごとく無へと還った。相手が生きた人間ではなく、人権も何もない機械だからこその残虐な暴力。皮肉にもこの機械達には、作られないか消されるかの二択しかなかったのだ。

「――殲滅」

「――完了」

降り積もる雪に熱を冷やされ、攻撃の余韻を振り払うかのようにデバイスを振るう。虚ろな声と赤く染まった新雪を残し、三人は本局へと転移した。

「…とりあえず、簡単に説明するわね」

時空管理局、本局。医務室の椅子に腰掛けて顔を伏せていたナツキ君に、私――シャマルは状況を説明する。

数時間前――夜勤として医務室で待機していた私の元に、ナツキ君とヴィータちゃんが駆け込んで来た。ヴィータちゃんはともかくナツキ君らしくもない行動に一体どうしたのか尋ねようとした私は、彼が背負っていた重傷患者（なのはちゃん）を見て全てを理解した。連絡を受けてから僅か数秒でユーノ君を抱えて飛んで来たユキちゃんと共に、全力で治療に当たっていたのが数分前までのこと。三人共疲労で倒れそうだったけどナツキ君――なのはちゃんにかつて救われた少年に何も言わずに寝ることだけは絶対にしたくなかった。

「なのはちゃんの傷は治ったわ。符が持たせてくれたのが大きかったわね」

問題の傷――バリアジャケット越しに貫かれた胸の傷は、痕一つ残さず完全に治療した。ユーノ君が無限書庫から引っ張り出して来た治療術式をユキちゃんが改変・強化し、私と共に掛け続けるというサイクルを繰り返したおかげもあり、なのはちゃんの容態は極めて安定している。

――だが、それだけでは終わらなかった。

「ただ、検査した時にわかったんだけど…。なのはちゃん、大分無理してたみたい」

カートリッジシステム。魔力を込めた弾丸をセットすることで、爆発的に魔力を強化するデバイス機構の一つ。私達の魔法体系――

ベルカ式には馴染み深いものだけど、彼女達ミッド式にとっては違う。元々カートリッジシステムは、保有する魔力量の低いベルカの民がそれを補う為に編み出したもの。つまりそれは、自らの限界を越えた魔力を扱う――――身体に尋常ではない負担を掛けるということ。ベルカの者なら長い年月を共に過ごして来た為、その使用限度や加減もわかる。

――――だが、彼女はそれを知らなかった。

全身に疲労が溜まっているだけならどれだけマシだったか。今の彼女は全身の魔力回路がずたずたのボロボロ、魔法を扱う為の器官、魔力の心臓とも言えるリンカーコアにまでダメージを受けている。完全に治療することも不可能ではないが、少なくとも一週間は絶対安静、一ヶ月間魔法禁止、というレベルの処置が必要だ。

「だからなのはちゃんはしばらくお仕事お休み。リンディさんには私が連絡しておくわ」

努めて明るく告げた私の声に対し、

「……ありがとうございます」

返って来たのは暗く重い、別人としか思えない声だった。普段の明るく笑顔が似合う彼の面影は一片足りとも残っていない。死人のような声とは、きっと今の彼のことを言うのだろう。

「…シャマル」

どんな時も決して屈せず、不敵な笑みを浮かべていたナツキ君。彼のあまりの変貌っぷりに驚いていると、件の本人がゆらりと立ち上

がり出口目掛けて歩き出した。その足取りはおぼつかず、千鳥足もかくやと言う程のふらつきっぷりだった。

「ナツ…！！」

「…なのはを、頼む」

思わず呼び止めようとするも遮るように言葉を切られ、私は何も言えないまま彼を見送ることしか出来なかった。

———瞬間、廊下から轟音が響き渡る。

「っ！？」

何が起きたのか確認すべく飛び出した私の目に映ったのは、

———無人の廊下と、放射状に刈れた壁。

誰の仕業か、なんて言うまでもない。あのナツキ君が物に当たるなんて今まで見たこともないが、それだけ今回のことが悔しいのだろう。

話を聞く限りでは、あの場の誰かに非があったとは思えない。知覚外からの攻撃を避けるのは不可能だし、気付いて警告出来ただけでも十分なくらいだ。実際被害は最小限に留められたし、なのはちゃんの傷もちゃんと癒えた。

———だけど、それは慰めの結果論に過ぎない。

一度だけ聞いたことがあるが、ナツキ君は昔ユキちゃんをフェイトちゃんの母親に目の前で殺されて、全てを捨てて殺意に囚われてい

た時期があったらしい。だけどなのはちゃんが命懸けでナツキ君を助けてくれて、本当の自分を取り戻すことが出来たと。塞ぎ込んでいたユキちゃんにそっくりなフェイトちゃんを見て、前に踏み出す覚悟が出来たと。

———だからこそ、許せない。

自らの恩人たる少女を、好意を寄せてくれる少女を守れなかった自分が。かつてフェイトちゃんが仮面の男にリンカーコアを抜かれた時も似たようなことがあったらしいが、今回は命の危険があった。下手すれば彼女は死んでいたかもしれない。

———だから、許せない。

———また何も出来なかった自分が。

あまりにも傲慢な、あまりにも悲しい自己嫌悪。なまじ優しい少年だからこそ、罪の意識は重い十字架となって彼の背中にのしかかる。

「ナツキ君…」

ぽつりと零した呟きは、無人の廊下に虚しく溶けていった。

「くそ…」

本局のエレベーターで移動しながら、ぐちゃぐちゃになった感情を吐き出すようにそう呟く。壁に寄り掛かるようにしながら唇を噛み締め、自らの愚行と力不足を悔いる。

「さっきのは…、マズイな…」

なのはを目の前で傷付けられ、感情の制御が利きにくくなり始めた。それだけならまだいい――――いいとは言い切れないがこの際は置いておく――――が、物に当たってしまったのは良くない兆候だ。シャマルの前ではどうにか押さえ込めていたが、無人になった瞬間楔が解かれ、衝動のままに拳を振るっていた。意図的に口数を減らしていたのは幸いだった。あまり長く喋っていたら何を仕出かしていたかわからない。

深く深呼吸し、感情の膠着を辛うじて取り戻すと同時、エレベーターが安っぽい音を奏でた。どうやら目的のフロアに着いたらしく、扉が開き薄暗い廊下が視界に広がる。ここは転送ポートが設置されたフロアで、演習場や多支部、次元航行船内部へはここから転移出来るようになっている。ヴィータが気を紛らわしたいと言って演習場へ行ってしまった為、容態報告兼迎えに行くところなのだ。

担当の局員と簡単な手続きをした後、転送ポートからとある演習場へと転移する。山岳地帯をモチーフにして、いくつかの山があるらしいその演習場。だが、転移を終えた俺の視界に広がったのは、

――――土砂や瓦礫で築かれた山と、陥没した地面。そして、その中央で荒い息を吐く紅い少女の姿だった。

「はぁっ…、はぁっ…」

演習場の中央――――ちょうど、一番高い山があった場所にぺたんと座り込み、あたしは荒い息を整える。元々感情を律するのが苦手なのは知っていたが、ここまで来るともはや笑えてくる。

———仲間を守れず物に当たり散らす騎士が、この世のどこにいるというのだろうか？

「…随分とまぁ、派手にやらかしたな」

と、背後からの声と同時、あたしの頭に帽子が被せられる。どうやらどこかに落としていたらしいが、そんなことにも気付かない程暴れ回っていたようだ。

「…笑えよ」

「…何を？」

唐突なあたしの言葉に、彼———ナツキが訝しげに尋ねてくる。…見てわかってくれれば、ありがたかったんだけどな。

「仲間（なのは）をやられて…、感情のままに暴れ回って…、こんな無様なあたしを笑えって言ったんだよ」

自虐するような笑みを浮かべ、あたしはナツキを見上げる。あたしと違って誰かを守れる強さを持った、あたしより騎士らしい少年を見遣る。が、

「…誰が笑うか」

———返って来たのは絶対零度の、何かを堪えるような声。

「一番無様なのは…、俺だ」

噛み締め過ぎた唇から血をぽたぽたと零しながら、ナツキが拳を振りかぶる。

———瞬間、愚行(築かれた山)の成果物が爆散した。

「気付いてたのに…、気付けたはずなのに…、なのに…っ！！」

一瞬で土砂と瓦礫をマイクロ単位の塵に変え、激情も顕わに言葉を零す。そんなナツキを見て、あたしは唐突にバカらしさに襲われた。

———ナツキ(こいつ)だって、同じなんだ。

目の前で大切な人を傷付けられ、助けられるだけの力があったのに何も出来なくて。あたしなんかよりナツキの方がずっと、何倍も辛いし悲しいんだ。

「…悪い、取り乱した」

「…お互い様だ」

それでもこの程度で抑えられる辺り、こいつの凄さが窺える。下手に慰めたところで惨めになるだけだし、それだけをボソッと返した。

「…なのはの容態は安定してる。大分無理してたから一ヶ月くらい休むらしいが、命に別状はないそうだ。あのアン(鉄層)ノウンについては上層部が調べてるから情報待ち」

「…そうか」

思い出したようなナツキの言葉に、あたしは少しだけ安心する。た

だでさえ管理局は人手不足で、優秀な人材に飢えているのだ。あいつははやてと同じで自分のことを抱え込んで無茶する奴だから、この際少し長めの休暇を取って貰おう。鉄屑は…、一体くらい調査用に残しとくべきだったと少しだけ後悔する。まぁ、過ぎたことを言っても仕方ないけど。

「…これからどうするんだ？」

「…決まってる」

一通り暴れたことで毒気が抜け、一種の虚脱状態に陥り指針を見失う。その感覚が命じるまま尋ねてみるとナツキは迷うことなく、

「なのはの分も仕事を回す」

———きっぱりと、そう答えた。

「…あたしにもやらせろ」

その言葉を聞いた瞬間、あたしは反射的にそう告げていた。何故、と自分でも思ったが、直感めいた何かがあたしをそうさせた為、あまりよくわからない。

「…お前は休め」

「バカ言ってんな」

間をおかずそう告げるナツキを遮り、あたしは笑いながらそう答える。何を言われたところで、今の言葉を覆すつもりは全くない。

「お前には…、借りが沢山あるんだよ」

龍に殺されかけた時も、はやてが危なかった時も。こいつはいつだって平然と、安心させるように頭を撫でて笑って。なんだって、やり遂げて来た。

———だから、今度はあたしが。

「…貸しなんか作った覚えないんだけどなぁ」

「あるんだよ、こっちには」

苦笑いしながら差し出してきた手を握ると同時、引っ張られる感触と共にあたしは助け起こされる。ホントこいつは…、誰かの為の行動ってのが身に染み付きまくってるな…。無自覚なんだろうけど。

「よろしく、一ヶ月限定の相棒」

「こっちこそ。管理局最強様」

互いに茶化し合いながら握手を交わし、あたし達は自らを酷使することを決めた。

「はぁっ…、はぁっ…」

周囲に散乱した生物だったモノ———具体的な描写は避けるがご飯時にはあまり見たくないモノ———を見遣りながら、俺は荒い息を吐く。半径五百メートル以内に生体反応がないことを三回確認して

から、ようやく警戒態勢を解いた。

――あれから、一週間。

幸か不幸か――俺達にとっては不幸だがなのはにはラッキーか――なのはが欠けて二人組になった俺とヴィータの元には、狙ったかのように大量の任務が雪崩込んで来ていた。今片付けたのが２５６件目――つまり一日当たり４０弱の任務をこなしている訳だが、さすがにそろそろ限界が来ていた。怪我は一瞬で治せても、疲労は休まない限りずっと溜まり続ける。ヴィータはアイゼンを支えに辛うじて立っているようなものだし、俺も口にこそ出さないものの実は結構キツイ。

「よおヴィータ…、そろそろ医務室のベットが恋しくなってきたんじゃないか？」

「はっ…、こっちのセリフだバーカ…」

背中合わせに座り込み、二人してバカげたやり取りをかわす。軽口を叩き合って、ようやく気力を保っているような状態。それがわかっていてなお、俺もヴィータも立ち止まる気は更々ない。

「今日は珍しく少なかったし…、そろそろ帰るか…」

「だな…。今日はなのはの退院日だし…、いい加減フェイトやはやてんとこに顔出さないと…」

互いにとぎれとぎれの言葉を交わし、よろよろと立ち上がる。

一週間――つまり、なのはの絶対安静が解除されるのが今夜。面会謝絶の為見舞いどころか会うことすら許されず、そろそろあの優

しい笑顔が恋しくなってきた。そのことが一層俺達に拍車を掛け、家にも戻らず泊まり込みで任務を片付けていたのだ。フェイトやはやてに会うのも一週間ぶりになる。

「じゃ、転移魔法を…」

『ナツキ君、ヴィータさん、いいかしら？』

転移用の魔法陣を展開しようとした瞬間、眼前にウィンドウと共に見慣れた顔が現れ動きを止める。この顔も一週間ぶりだなぁ、とぼんやり考える辺り、俺も相当参っているのかもしれない。

『そこのすぐ近くの管理外世界に、所属不明の大型魔力反応が現れたの』

「っ！？」

彼女―――リンディ・ハラオウンの言葉にヴィータが息を呑むが、俺はさして驚かない。確かに珍しい事態だが、前例（なのは）が身近にいるし、な。

「…ランクはどの程度ですか？」

『贔屓目に見てＡＡＡ、ってところかしら』

管理局では魔力保有量や技術に応じて、それぞれランク分けをされている。Ｆを最底辺にＡまで上り、ＡＡ、ＡＡＡの次にＳ、ＳＳ、最高ランクのＳＳＳといった感じだ。俺はここ二年で半ランク上がりＳ＋、ヴィータはＡＡ＋と言ったところか。

「ＡＡＡか…、だから俺達って訳ですか」

『一番近い、ってのもあるけどね』

ＡＡＡというとなのはやフェイトと互角クラスの力を保有しているということ。彼女達と渡り合えるのは俺とヴィータ、シグナムにクロノ、シオンとエリスにユキくらいのものだろう。はやてとイリヤはランク的にはなのは達より上だが、広域殲滅魔法に特化している為一対一に向かず、詠唱前に叩かれてしまうのだ。…そう考えると、はやて達と同じスタイルでありながら一対一で俺やなのは達を負かせるユキはどれだけ異常なのだろう。…考えるだけ無駄か。

「それで、場所は？」

『座標は今送ったわ。以前フェイトがコアを抜かれた場所、と言った方がわかりやすいかしら』

「…あそこか」

二年前―――不慮の事故でフェイトのリンカーコアが抜かれた砂漠の世界。目の前で妹を傷付けられ、俺が黒い感情に囚われた、嫌な思い出の眠る場所。

『今からフェイトやクロノ達も向かわせるから、無理だけはしないでね』

「…了解」

増援の知らせに頷くと同時、ウィンドウが消え静寂が戻ってくる。脳内で現状を整理し、深々と溜め息をついた。

今は十二月――年二回しかない超難関試験、フェイトの夢である執務官試験が実施される月だ。ただでさえなのはの件で心配を掛けているし、これ以上負担を増やしたくないのが本音。――蛇足だが、俺はちょうど一年前に合格している為、今は一応執務官。自然と後輩になるフェイトとの行動時間が増えることになる。それを嬉しそうに話しているフェイトを見て、不満げに頬を膨らませるもう一人の少女。そんな数週間前の出来事を思い出し、回想をやめる。

「…速攻で片付けるぞ」

立ち上がって声を掛けようとするが、先にヴィータの方が口を開く。アイゼンを支えに使わなければ立てない程ふらふらの状態だが、瞳に秘められた戦意はそれを感じさせない程強烈だった。

「…当然」

さっさと帰って、なのはに会いに行く――ヴィータの言外の本音に頷き、俺も銀刀を握り直す。既にアクセルが準備を進めていてくれた為、転移はいつでも出来る状態だ。

《Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ（展開）》

デバイスの声と同時、俺達を中心とした銀色の魔法陣が展開される。散乱した死体を周囲に残し、俺達は目的の世界に転移した。

「はぁっ…、はぁっ…」

走る、走る、走る。それだけを考えただひたすらに、砂漠のど真ん

中を駆けて行く。端から見れば今の彼女は、ひどく滑稽な姿をしていると言える。和風姿で砂漠を必死に走る十にも満たない少女、なんて誰が想像出来るだろう。
そんな少女の背後で絶望(死)が、不気味な唸り声をあげた。少女を追い掛けるかのように、地中から何かが現れる。

———それは、蠍だった。

鈍く輝く黒い胴体に、忙しなく動き速度を稼ぐ四対の足。そこだけ見ればどこにでもいる———生息地を探せば、の話だが———ごくごく普通の蠍だった。

———違う点を挙げるならば、鋏が鎌状に変形していることと尾が歪で通常の倍近く太いこと、そして蠍自身の大きさが数メートルを越えることだろうか。

「はぁっ…、はぁっ…」

少女は振り返らず、ひたすらに前へと進む。見たって現実は変わらない、ならば少しでも前へ。そんな合理的な思考が彼女から無駄な動きを削り落として行く。

「あっ…」

が、いかんせん限界だった。和風はその構造上、激しい動きをするように出来ていない。裾を踏ん付けつんのめった少女は、そのままの速度で顔面から地面に突っ込んだ。

「むぅ…」

赤くなった鼻を擦る彼女の周囲が、闇夜の様に暗くなる。追われている方が足を止めれば、相対的に追う方は追い付く。なんてことはない自然の摂理。蠍が少女に追い付いた、ただそれだけのことだ。

「ひっ…」

こんなはずじゃなかった。ただ少女は外の世界が見たかった。だから隙を見てあそこから逃げ出した。それだけだったはずなのに。

「姉上…っ！！」

自らが最も信頼する人物の名が零れ落ちるが、その声が遥か遠くにいる姉に届くはずもない。ゆっくりと振り上げられた鎌が、少女を切り裂くべく大気を切り裂き少女に迫る———

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

が、そんな蛮行を許す程、白銀の守護者と紅の鉄騎は甘くなかった。漆黒と鋼の混合弾幕が鎌に激突し、蠍の注意が逸れる。

「ギリギリセーフ、だな」

見上げた蠍の視界に映ったのは、漆黒の少年と紅い少女。銀刀と鉄槌を構えた、時空管理局最高クラスの魔導師達だった。

「間に合ったか…」

カートリッジを排出しながら、眼前の光景を見遣り安堵の溜め息をつく。転移した瞬間巨大蠍に襲われる少女、というとんでもない光景が視界に飛び込んで来て慌ててカットしてしまったが…。

「…どう見ても例の反応ってあの子だよな」

「…むしろ逆ならキレるぞあたしは」

ヴィータのセリフを受け蠍を庇って少女と戦う自分を想像、即座に後悔しやめた。敵対している訳でもない少女に刃を向ける気にはならないし、第一どう見ても少女の方が被害者だ。この状況を見て蠍の味方をするのは狂人か蠍好きくらいのものだろう。

「とりあえず俺があいつの気を引くから、ヴィータは女の子の保護を頼む。上手くやれよ」

「了解…！！」

俺の指示にヴィータが答え、ロケットの如く勢いよく飛び出した。…今の俺達じゃ、こいつと戦っても間違いなく負ける。二人とも一週間分の疲労が溜まっているし、ヴィータに至ってはもはや戦うことすら出来ないだろう。シュワルベフリーゲン――――先程の鉄球を打ち出すだけでもかなり辛そうだったし、気を抜けば飛行魔法すら維持出来なくなるのは想像に難くない。

が、かといって俺もそこまで言える程余力がある訳ではない。レールガンやブレイカーなんて撃てないし、ザンバーだってあと十回も出せればいい方だ。フルドライブでＤＲＭという切り札もあるにはあるが、今の状態ではそれも難しい。如何に優れた車でも、ドライバーの腕が伴わなければただの鉄の塊でしかない。つまりはそうい

うことだ。
元々俺とヴィータだけで片付けるつもりだったが、それは相手が人の場合の話。先程のシューターもほとんど効いていないし、レールガンクラスでもないとあの甲殻は貫けないだろう。だがその余力がない、そんな堂々巡りが今の状況だ。

「…撃退出来ればラッキー、増援まで持てば及第点ってとこか」

そう結論付け、俺はアクセルを握り直す。最優先事項は倒すことではなく時間を稼ぐこと。その為に今出来る最適解は…。

「…アクセル」

《Ｔｈｅ　ｏｎｅ　ｔｏ　Ｄｒｉｖｅ　Ｒｅａｓｏｎ　Ｍａｄ，Ｓｔａｒｔ（理を狂わすモノ、起動）》

デバイスの声をトリガーに、俺の背中から一対の巨大翼が生える。銀光を大気に振り撒くそれは、周囲の魔力を無限に取り込む俺の切り札（ジョーカー）。

――――神なる、翼。

「ゴールの見えない持久戦、か。まさかまたここでやることになるとはな」

《Ｔｈｅ　ｓｅｎｔｉｍｅｎｔ　ｉｓ　ａ　ｂａｃｋ（感傷は後だ）》

「了…、解っ！！」

二年前の出来事――――龍に喧嘩を売ったヴィータ達を守るべく戦った時のことをふと思い出し零れた言葉に、アクセルは至ってドライに答えた。苦笑しながら俺は宙を蹴り、蠍の正面に回り込む。

――――数百メートル近くあった距離を一瞬で詰めて、だ。

驚愕かはたまた別の理由か。動きを止めた蠍の目を狙いアクセルを振るう。黒色のエネルギーを纏った刃は宙に白銀の軌跡を描き、流れるように斬撃を叩き込んだ。

眼球から緑色の体液を噴水のように噴き出しながら、蠍が仰け反り苦悶の声を上げる。如何に堅い甲殻といえど、目や口などの感覚器官まで塞いでいる訳ではない。見る者によっては卑怯と罵るかもしれないが、これが一番合理的な方法なのは事実。最悪時間を稼いで逃げ切ればいい訳だし、無駄な殺生をする気もない。少女を守る正当防衛という免罪符もあるし、一々気にしていたらやっていられない。

「っ！？」

そんなくだらない思考をしていた俺の眼前を、鈍色の物体が通過し我に返った。片目を潰された蠍が闇雲に鎌を振り回していると気付くと同時、背の翼を羽ばたかせ距離を取る。あんな一撃を食らったら一溜まりどころか一発で昇天しかねない。…落ちる可能性も捨て切れないが。

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

接近戦は控えるべきかという俺の思考を汲み、アクセルが宙に数十からなる黒色の弾丸を生成する。なのはのアクセルシューターを元にしたこの魔法は操作性に優れ、変換資質を付加してある分威力は

彼女を上回る。

「ショット！！」

掛け声と共に弾丸が加速、蠍目掛け殺到する。暴れ回る蠍の隙間を縫い、的確に比較的柔らかい部分を穿っていく。この調子なら十分は持たせられるか…？

《Ｍａｓｔｅｒ！！（主人！！）》

油断とも取れる思考を遮るように、アクセルが一言だけ叫んだ。慌てて周囲に注意を向けた瞬間、とんでもない光景が視界に飛び込んで来る。

―――蠍が、ヴィータ達に気付いていた。

ヴィータも遅れて気付いたようだが、全く動く様子がない。蠍がそちらに向かい始めたというのに、それでもヴィータは飛ばない。

「まさか…！？」

―――魔力が、尽きた！？

「くそ…！！」

一週間分のツケがこんな時に回って来るなんて…！！もうちょっと後でも罰は当たらないだろうが…！！

「間に合え…！！」

鎌を振り上げる蠍に焦りを抱きながら、俺は文字通り全力で飛翔した。

ナツキは宣言通り、上手く蠍の気を引いているようだ。ＤＲＭを起動したってことは本気ってこと。本気のナツキに勝てる奴なんて数える程しかいないし、闇の書の闇さえぶった斬れるのだからきっと大丈夫だろう。

―――ならあたしは、自分の仕事を全うするだけ。

「おい、大丈夫か？」

「……ぬ？」

例の反応と思われる少女―――長い黒髪に黒い和服が特徴的なあたしと同い年くらいの少女に声を掛ける。事態がよく飲み込めていないのか、彼女はぽかんとした表情を浮かべていた。

「えーと…、今あたしの仲間があのデカブツの気を引いてるから、今のうちに逃げるぞ」

「う、うむ…」

あたしはお世辞にも人付き合いが上手いとは言えないが、どうやらこの少女も同じようだった。あたしのしどろもどろな言葉にぼそぼそと答え、立ち上がりながら砂を払う。注意深く見てみると僅かながら、彼女から魔力の残滓が感じ取れた。転移魔法でここに来たところ、あいつに気付かれ追われてた、といったところだろう。…何

故こんな辺境にいるのかは置いておこう。気にしてたらキリがないし。

「っ！？」

と、ぼんやりとそんなことを考えていたあたしの背後を見ていた少女が、不意に息を呑み動きを止めた。訝しげに思いながら振り返った先には、

———あたし達を睨む、蠍がいた。

「あ…」

ヤバい。普段ならともかく今のあたしじゃ、少女を庇いながら戦うのは不可能だ。ナツキもこっちに気付いたみたいだし、早く離脱しないと…！！

「待ってろ、今…、っ！？」

少女を抱え飛ぼうとした瞬間、あたしは重大なことに気付いた。

———魔力が、尽きた。

「おい…、冗談だろ…？」

カートリッジもさっきのシュワルベフリーゲンでなくなったし、DRMなんてあたしは使えない。いくらなんでもタイミングが悪過ぎる…！！

「アイゼン！！」

恐怖に駆られ相棒の名を呼ぶが、返って来るのは痛い程の沈黙。それがあたしに絶望的な現状を再認識させ、思わずくずおれそうになる。
今のあたしは、魔力のないあたしは普通の女の子に過ぎない。巨大なバケモノを相手にして、八歳の女の子二人が勝てる訳がない。

―――絶望的な、無力感。

あたし達の目の前に辿り着いた蠍が、ゆっくりと鎌を振り上げる。先程と全く同じ状況、狩られる立場にあたしが追加されただけのこと。

「ちくしょう…」

あれが振り下ろされれば、あたしも少女も一瞬で絶命するだろう。いともたやすく、あっさりとあたし達は死んでしまうだろう。

「ちくしょう…！！」

まだ死にたくないのに。なのはに謝れてないし、はやてにも会えてない。まだまだ、やり残したことがたくさんあるのに。

「ちくしょおおおおお！！」

絶叫と共に目を閉じた瞬間、死を運ぶ鎌が振り下ろされた。耳障りな風切り音を奏でながら、あたし達目掛け一直線に―――

―――ぐしゃっ。

何かが潰れたような音が響き、周囲に鉄臭い匂いが充満する。不思議と痛みはなかった。これなら死ぬのもあんまり怖くないかな…。

「あ…、ああ…」

ふと少女が絶望の声を上げたが、少し様子がおかしい。
あたしは闇の書――夜天の書の守護騎士として、様々な戦場を渡り歩いて来た。そこでは悲鳴や絶叫が響き渡っていたから、あたし達は声からなんとなく心情がわかるようになっていた。今の彼女の声は、普通ならば恐怖や痛みの感情が込められているはず。だが実際に込められていたのは、

――疑問と、悲しみ。

「な…」

何故という一瞬の疑問は、目を開けると同時に飛び込んで来た光景を見て氷解した。

――そこにあったのは、世界一不快で奇妙なオブジェ。

人型の何かを貫くようにして、巨大な鎌が刺さっていた。感受性の強い者が見れば、断罪とか審判みたいなタイトルを付けただろう。

――それが、本当の人間でなければ。

「ナツ…、キ…？」

こちらに背を向け、あたし達を庇うようにして立つ彼は、無言のまま答えない。それから永遠に思える数秒が過ぎた後――

――鎌が抜かれると同時、血が激しく噴き出した。

「なっ、おい！！」

そのまま倒れ込むナツキを抱き抱えた瞬間、あたしはそのあまりの軽さにゾッとした。無理もない、腹を貫かれて内臓を破壊され、どう見ても致死量の血を流しているのだから。

「しっかりしろよ！！おい！！」

あたしの紅いゴスロリのドレスが、ナツキの命を吸って更に朱く染まっていく。ボロボロと涙を零しながら、あたしは必死に何度も呼び掛ける。

なんで？どうして？その言葉がぐるぐると回り、何も考えられなくなっていく。だってあたしのミスなのに。ナツキは何も悪くないのに。

――なんで、ナツキがこんな目に遭わなくちゃならない？

「あ…、ああ…」

奇しくも一週間前と同じ構図で。あたしはナツキを抱き抱えたまま。

「あああああああっ！！」

――悲しみを吐き出すように、絶叫した。

中編「怒りと後悔」（後書き）

あーあーあー↑書いた人
なのはに続きナツキまで撃墜、しかもなのは以上の重体という。これから一体どうなることやら（ぇ

次回、決着と完結。そして謎の少女（笑）の正体が明らか？に（オイ

後編「守るということ」（前書き）

はい、ラストです。三日だったからあっという間でしたねw
まあ細かいことは抜きにして、とりあえず読んでやってください。
ではどーぞー

後編「守るということ」

痛みは、なかった。
ただ熱さと、達成感のようなものがあった。
二年前――ユキを目の前で殺されて、なのはやフェイトが傷付けられて。だけど俺は、何も出来なかった。守ることも出来ず、庇うことも出来ず、ただ見ていることしか出来ず。そんな自分が、殺したい程に憎かった。
なのはやフェイトに好意を寄せられて、嬉しいと思う反面疑問もあった。
どうして、何も出来ない俺なんかを――
そんな思いが心のどこかにあって、二人の想いを正面から受け止められずにいた。
強迫観念のようなもの――かつてリンディさんは、俺のそれをそう称した。自分がやらなきゃ、みんないなくなってしまう。そんな本能の如く染み付いたトラウマが、俺の精神を縛り変質させたのだと。
その時は何をバカなと思ったが、今になってようやくわかる。何も考えずヴィータを庇うように立ち塞がっている時点で、本能だの反射だの言われても反論は出来ないのだから。自身と他者（ヴィータ）を天秤に掛け、自分を捨てた時点で俺は狂っていたのだから。アクセルがとっさにプロテクションを張ってくれなかったら、一瞬で絶命していただろう。

「――――!!――、――――!!」

ヴィータが涙を零しながら、必死に何かを叫んでいる。が、今の俺にそれを聞き取り理解するだけの力は、もう残されていなかった。

（いいよな…、これで…）

おそらくなのはと同じ熱さを感じながら、守れたという幸せに包まれながら、

———俺は、深く昏い闇に呑み込まれた。

少年から抜き取った鎌に付いた朱い液体———生命の証たる血液を興味なさげに眺めた後、蠍は汚れを落とすかのように鎌を振った。

「ナツキ…、死んじゃダメだ…。ナツキぃ…」

もはや棺桶に片足どころかほぼ全身を突っ込んだ少年を抱き抱え、紅い少女は泣き叫ぶ。かつて姉上が自分を庇って怪我をした時も、あんな風に泣いていたな、とそんなことを考える。

と、少年の血（汚れ）を落とした蠍がこちらを睨み、再び鎌を振り上げた。今度こそ二人の少女を仕留めようと、そういう魂胆なのだろう。

「…下種が」

その光景を見て、自然とそんな言葉が漏れる。汚い言葉を使うなと普段から母上には言われているが、今回ばかりは我慢出来なかった。そんなこちらに構うことなく、蠍は容赦なく鎌を振り下ろした。あんなものを食らえば、一瞬で黄泉への片道切符が手に入るであろうことは想像に難くない。少女が息を呑み、少年を庇うようにぎゅうっと抱きしめる。例え無駄でも、自らを守ってくれた少年を守ろうとしたかったのだろう。

――――だが、その想いは無駄にはしない。

「…舞え」

彼女が一言呟いた瞬間、蠍の鎌が炎上した。ナツキとヴィータの攻撃が全く通じなかった堅い甲殻を、一瞬で灰へと昇華させる。

「……え？」

いつまで経っても衝撃が来ないことを不審に思ったヴィータが顔を上げ、それ以上に衝撃的な光景を見てぽかんとした声を上げる。それをきっかけに蠍も遅れて事態を理解し、苦悶の叫びを上げた。

「集え、業火」

彼女が再び呟くと同時、何の前触れもなく大気が発火した。周囲を舞うようにして集まった炎を、彼女は身に纏うようにして練り上げていく。

「――――覚悟しろ、下種」

背後には死にかけの少年が一人。それを抱き抱えたまま目をぱちくりとさせる少女が一人。そして眼前には、その人間に致命傷を与えた巨大な蠍（バケモノ）が一匹。僅か数分で環境はこうも変わるものなのか、と普段の彼女なら、庭園（箱庭）の中で一生を終えるはずだった彼女ならば感激していただろう。

――――だが、今の彼女は違う。

「貴様はわしを怒らせた。何の関わりもないわしを救おうとしてくれたこやつを傷付けた。だからわしは貴様を許さぬ」

束ねられた炎が翼となり、ナツキのＤＲＭと似た姿となる。手に握るのは炎を集めて作り上げた、一本の燃え盛る剣。

――彼女の、本気。

「骨まで？温い。死ぬまで？甘い。貴様はこのわしが…、龍神の末裔たるこのミサオが…、塵一つ残さず焼き尽くして殺してくれるわ…！！」

名乗りをあげた彼女――ミサオは戦意に瞳をぎらつかせ、祈りを捧げるかのように舞の構えを取る。

「天に眠る開祖の龍よ――龍神が末裔ミサオの名において、八咫の烏の禁を解く――」

封印解除――要約するとそう告げた瞬間、ミサオから溢れ出す魔力（プレッシャー）が跳ね上がった。更に大量の業火を集わせ、炎を従える女王のように毅然と二人の前に出る。

「世界（全て）を焼け――天照！！」

大切な存在を守る為――奇しくもナツキの意志を継ぐかのように、ミサオは蠍を睨みつけた。

不意を突かれ驚きこそしたものの、所詮相手は十にも満たない幼き少女。多少炎を操れたところで、己の絶対的有利な状況は揺るがない――――恐らくそう考えたのだろう、蠍は次の攻勢に出た。毒液を滴らせた尻尾を、無数の槍として連続で突き込む。さながら剣戟の雨のように放たれたそれは一発一発が致死量の威力を秘め、毒で確実に相手を葬り去る必殺の武器。何も知らない者が見れば、勝敗は決したと思うだろう。

――――だが、蠍は彼女の本性を知らなかった。

「――――焔薙」

少女が凛と響く声で、祝詞を捧げるように言葉を紡ぐ。合わせて振るわれた業火の刃が、軌跡上の尻尾を薙ぎ払う。ほんの数秒後、最初に異変に気付いたのはヴィータだった。

――――尻尾が、ない。

体長の半分程を占める、毒纏いし剛槍が根本から焼失していた。少女達になんのダメージもないことを不審に思った蠍も、振り返った瞬間事態を理解し、苦痛の叫びを上げる。

「天照らす炎を舐めるな、下種」

対しミサオ――――尻尾を一瞬で塵一つ残さず蒸発させた少女は余裕綽々、戦闘開始時と寸分違わぬ場所で相手をバカにするように――――力の差を理解出来ない愚者を笑うように言葉を投げかける。少女の不機嫌そうな、しかし変わらぬ無表情を見て恐怖に駆られた蠍は、それをごまかすように残った唯一の武器である鎌を振り下ろした。ナツキを貫いた忌まわしき刃を眺め、ミサオは再び言葉を紡ぐ。

「――――焔月」

瞬間、彼女が握る剣が肥大化した。長さも太さも倍近くになり、幼い少女が持つには不釣り合い過ぎる大剣となる。蠍はその光景を見て一瞬怯むが、その隙を逃す程少女は甘くない。流れるように振るわれた刃が鞭のようにしなりながら蠍に迫り、

――――驚く程あっさりと、鎌を斬り落とした。

何もせずとも簡単に外殻を焼き払う程の炎が、鋭い剣に束ねられた上柔らかい関節部を狙ったのだ。むしろ斬れない方がおかしいと言えるだろう。全ての武器を失った蠍は、絶叫と共に背を向け逃げ出す。当初あった慢心は跡形もなく粉砕され、純然たる恐怖が体を動かしていた。

――――だが、彼女はそれすら許さない。

「――――焔舞」

三度紡がれた言葉と同時、ミサオが蠍の正面に現れた。普通ならば恐怖を感じるはずの状況だが、しかし蠍が感じたのは浮遊感だった。それも無理はないだろう、何せ――――

――――全(八本)ての足が原形を留めない程に焼き尽くされた上、完全に断ち切られているのだから。

「最初から思っておったが、その音はやかましいのじゃ」

移動時に発生する異音の発生源を、理不尽な文句と共に破壊し動く

ことすら封じられ、桜の花びらのように周囲を火の粉が舞う光景を見ながら、蠍は今度こそ絶望した。逃げられない。勝てない。ここで自分は死ぬ。純然たるその三つの事実が頭の中をぐるぐると回り続け、恐怖で思考が壊れていく。

「――では、そろそろ終わりにしようかの」

その様子に満足したように、少女が刃を宙に溶かす。終わり、刃を消す、それらが示すことはつまり、見逃してくれるということ。一筋の希望を見出だした蠍がホッとした瞬間、

「約束通り――塵一つ残さず焼き尽くして殺してくれる」

――ミサオはトドメの一言を放った。

絶望のどん底に叩き落とされた蠍を笑い、少女は左手を天に掲げる。周囲を舞っていた炎が集い、巨大な魔力を伴って集束していく。

「童、目を塞いでおれ。目が死ぬぞ」

「……あ、ああ」

少女の声が自分に向けられたものだと気付き、ヴィータは慌てて背を向け目を閉じる。それを確認したミサオは頷き、最後の祝詞を紡いだ。

「――天照」

――瞬間、闇が消えた。

いや、違う。背を向け目を閉じた上で塞いでいるのに、それを貫く程強烈な――まるで太陽を直視しているかのような光を彼女が放っているのだ。

――八咫烏。

日本神話に伝えられる、太陽の化身とされる三本足の烏。その禁を解いたミサオの変換資質である炎熱は天照大神――太陽を神格化した神の名を冠した力となる。最強の生物とされる龍神――天に通じる巫女でもある彼女だからこそ扱える神代の力。

――変換資質、天照。

「世界(全て)を、焼け――」

彼女の言葉をトリガーに、太陽から炎が溢れ出す。放たれた炎はプロミネンス(大蛇)の如く、蠍を食らい呑み込んでいく。悲鳴を上げる暇さえ与えられず、蠍は一瞬で塵一つ残さず蒸発した。

――それが彼女の逆鱗に触れたモノに訪れる、唯一無二の終焉(最期)。

「約束は果たしたぞ、下種」

炎を宙に溶かしたミサオが、ヴィータ達の方に歩き始めながらそう呟く。その言葉を聞くモノも答えるモノも、もうこの世にはいなかった。

「……ん」

まどろみから目覚め、ゆっくりと体を起こす。薄暗い光景――月明かりの差し込む病室のような部屋が目に入った。…記憶が混乱しているのか、直前に何があったのか思い出せない。必死に脳内の記憶を手繰り寄せ、現状把握を試みる。

「……っ！？」

そうだ…。ヴィータと女の子を庇って刺されて瀕死の傷を負ったんだった…。でもその割には痛みもないし…、

「…起きた？」

と、ちょうど俺の陰になっている場所から声が響いた。茶色のショートヘアーに、赤と黄のヘアピン。一週間ぶりに見る幼馴染、八神はやてだった。

「久しぶりだな…、はやて」

「二週間ぶりやもんね」

「……え？」

――二週、間？

「ち、ちょっと待て。今日は何日だ？」

「十二月二十四日。クリスマス・イヴや」

えーと、確かなのはの退院日が十七日で、俺が倒れたのもその日。

その時はやて達と会わなくなって一週間が経ってたから…、

「…俺、一週間も寝てたの？」

「一週間ぶっ続けで仕事した上死にかけてたにしては早い思うけど？」

呆然と尋ね返した俺を皮肉るように、ジト目を返すはやて。…まぁ、それに関しては反論出来ないな、確かに。

「あれからどうなったんだ？」

「ちょうど別件で近くの世界にいたシオンちゃん達が最初に着いたんやけど…、大分酷かったそうや。ナツキ君を抱き抱えて泣きじゃくるヴィータとあの子がおって、その時のナツキ君を見とったらフェイトちゃんは発狂しとったかもしれへん、って」

内臓もろとも腹を貫通された傷に、ヴィータのドレスを染め上げる程大量の出血。確かにあのフェイトが見たら、精神が壊れていたかもしれない。

「イリヤちゃんが治療魔法で持たせてくれて、シャマルとユキちゃん、ユーノ君が三人掛かりで丸一日。どうにか傷は塞がって、疲労と血液不足でずっと寝とったんよ」

「そうか…。ヴィータは？」

現状を整理し終え懸案事項の一つである少女のことを尋ねると、はやては黙って俺の足元を指差す。視線を向けたその先には、俺にもたれ掛かるようにして眠るヴィータの姿。目には泣き腫らした跡が

あり、大分心配を掛けたことは一目瞭然だった。労るように頭を撫でると少しだけ表情が和らいだのが、せめてもの救いだった。

「ナツキ君、いい？」

「？何が…」

唐突な上訳のわからないことを言い出したはやてに振り返った瞬間、

―――思いっ切り、頬を張り飛ばされた。

乾いた音が静寂を切り裂き、病室に完全に溶けてから、俺はようやく何が起きたか理解した。痛いというより熱い頬を抑え、何すんだと反論し―――

「確かにナツキ君は助かった…。ヴィータを守ってくれたことも感謝してる…。けど…！！ナツキ君が死んだら何の意味もあらへんやん！！」

―――ようとして、涙をぽろぽろと零すはやてを見て踏み止まる。確かに端から見れば愚行、命を投げ出すようなことをして、この優しい少女が怒らない訳がなかった。

「身を呈して守っても…、その本人がいなくなったら…、悲し過ぎるやん…！！」

かつてのリインフォースが同じだったから、だからこそその時に嘆き悲しんだはやての言葉は俺の心に深々と、言の葉の刃となって突き刺さる。

「いや、でも…」

「…起きたんだ」

やや押され気味ながらも反論しようとすると、入口付近から聞き慣れた声が響いた。腰まで伸びた銀髪に赤い瞳、俺の実妹である天城ユキだ。

「はやて、どいて」

顔を伏せたままつかつかと歩み寄って来たユキははやての肩を引き、俺の前に立つ。そのまま何かを堪えるように左拳を握りしめ、

―――俺を思いっ切り、殴り飛ばした。

「なっ…！？ユキちゃん！？」

「黙ってて」

窓ガラスに激突しズルズルとずり落ちる俺を見てはやてが制止しようとするが、ユキはそれを遮り再び俺の眼前へ歩いて来る。

「この大馬鹿兄が…！！」

俺の襟首を掴み上げ、伏せていた顔を上げ、

「あんたはあたしの兄貴でしょうが！！シオン達の名付け親でしょうが！！あの子の…、フェイトのお兄ちゃんでしょうが！！」

―――泣きながら、絶叫した。

「あたし達はみんなみんな…！！あんたに身も心も救われてんのよ！！あたしはお兄ちゃんがいなきゃ生きられない！！シオン達だってあんたがいなきゃ悲しむ！！フェイトだって…、今度こそ壊れちゃうかもしれないのよ！？」

全てを失い絶望していたユキも。己の意味を失い消えようとしていたシオン達も。家族という拠り所を求めていたフェイトも。俺が自ら望んで、危険を省みず全力で助けた。救おうとした。

———だが、もしその俺が消えたら？

———それは、俺が今まで考えたこともないことだった。

「守る守る言ったって、所詮傲慢な自己満足でしかない！！あたし達はあんたがいるだけでいいのに、罪悪感に囚われたあんたがいつもいつも一人で無茶して！！こっちの気持ちになってみなさいよこの馬鹿！！」

珍しく感情を爆発させ、烈火の如く怒り俺を怒鳴るユキ。ここまで感情を表に出したのは、ずっと一緒にいた俺の記憶を探っても片手の指で数え切れる程しかない。

「もうやだよ…。お父さんもお母さんも死んじゃって…、お兄ちゃんまで死んじゃったらあたしは…、あたしは…」

無事を確認したことと怒りをぶつけたことで緊張の糸が切れたのか、ユキはそのままズルズルとずり落ち始めた。慌てて支えるが既にユキは意識を失って、微かな寝息を立てていた。

「ユキちゃん、普段通り振る舞ってたけどホントはすごく心配して
て…、ここ最近一睡もしてないんやて…」

「…ゴメン」

素直じゃないたった一人の家族をベットに寝かせ、罪悪感を吐き出
すようにぽつりと呟く。強気に振る舞っていたってこいつは…、ホ
ントはいつだって失うことに怯えてるんだ…。

———俺と、同じで。

かつてプレシアの一撃から俺を守ろうとして、ユキは俺の目の前で
死んだ。あの時の俺と同じ気持ちをみんなに味わわせたと思うと、
申し訳なさと自分への怒りで頭の中がぐちゃぐちゃになる。

———俺は今までずっと、間違っていたのかもしれない。

「…はやて、あの子は？」

「屋上で空を見てるよ。一週間前からずっと」

もう一つの懸案事項であるあの少女———黒髪と和服が特徴的な少
女のことを尋ねると、はやてから間髪入れず答えが返って来た。元
々あの少女の反応が現れたから俺達が急行した訳で、当然事情聴取
なども行っただろう。現在位置くらい把握出来て当然か。

「わかった…。ユキを頼む…」

「うん…」

妹を幼馴染に託し、俺は彼女と話をするべく歩き出した。

「ああ、天城。起きたのか」

「起きて早々説教されまくったがな…」

廊下を移動中、ピンクの髪をポニーテールに束ねた少女と出会った。はやてが持つ夜天の魔導書の守護騎士が将――剣の騎士シグナムだ。俺とは既知の友人で同じ剣を扱う者同士――と言っても俺は刀だが――通じるものがあり度々手合わせをしていたりする。

「なら私が殴る必要もなさそうだな」

「サラっと怖いこと言うなよ…」

はやてとユキの連続攻撃でやや腫れた俺の頬を見て、残念そうに呟くシグナムに思わず突っ込む。いつから俺の周りにはバイオレンスが流行り始めたのだろうか…。

「…なあ、シグナム」

「なんだ?」

「俺…、間違ってたのかな」

ふと自分とよく似た少女――主であるはやてを守る為に刃を振るう彼女に、誰かの為に戦える彼女に少し聞いてみたいことが出来た。

「確かにユキの死は俺の中のキーポイントで…、無茶してでも大切な人を守りたいと思った。例え自分が死んだとしても、その人が無事ならそれでもいいと思ってた」

かつて目の前で失ったからこそ、もうあんな光景を見たくなかった。同じ思いをしたくないから、させたくないから俺は今まで戦って来た。

「だけどはやてとユキに説教されてさ…、わかんなくなったんだ。戦わなきゃ守れない。でも戦って傷付けば悲しまれる。そんな堂々巡りに囚われた天城(馬鹿)ナツキはさ…、どうすればいいと思う？」

半ば自嘲するように放った俺の言葉を、シグナムは正面から真面目に受け止めてくれた。しばし思考した後、考えが纏まったのかゆっくりと話し始める。

「確かに守ろうとする意志は、人の力を限界まで引き出す鍵となる。力は意志がなければ振るえない、それはわかるな？」

シグナムの言葉に何を今更と俺は頷く。ジュエルシードの時も、闇の書の時も。なのはとフェイトを守りたかったからこそ、俺はあそこまで戦えた。少なくともそこだけは、自信を持って言い切れる。

「だが…、もしその人がお前と同じだったら？」

「……え？」

――――俺と、同じ？

「その人もお前と同じで、天城(大切な人)ナツキを守りたくて…、だからこそ

彼が自分より前に出て、傷付くことを誰よりも悲しむ」
なるほど確かに、つまり今回の出来事はそういうことかもしれない。互いが互いを想うからこそ、平行線の想いは交わることが出来ない。
「ならば…、共に戦えばいい」
それに対するシグナムの答えは、一人で戦うことでも、ましてや戦いから逃げることでもない、第三の選択肢。
「守る守られるの関係ではなく、肩を並べて戦えばいい。互いに頼れるパートナーとして、安心して背中を預けられる相棒として、お互い向き合っていけばいい。互いの互いを守りたい想いが…、きっと二人を強くして、今まで以上に強くなれる。少なくとも私はそう思う」
忘れたのか？とシグナムは呆れたように、しかし笑いながらその一言を、
「強い想いがあれば貫ける――――それを私に教えたのは他ならない天城自身だぞ？」
――――俺の初心を、告げた。
「…ありがとな、シグナム」
周囲を覆っていた靄が晴れたかのように、声が軽くなったのが自分でもわかった。結局のところ、今まで通りでいいんだ。
――――自分がやりたいことを、やりたいようにやるだけ。

――ただし今度は、みんなで一緒に。

「少しだけ…、少しだけだけど…。自分のやりたいこと、見えた気がするんだ」

「役に立てたのなら何よりだ。私もお前には借りがあるからな」

借りなんざ作ってねぇよと苦笑しながら、シグナムと別れ階段を昇る。覚悟は決まった。後はただ成し遂げるだけ。その為にも――

「…空見るの、好きなのか？」

屋上の扉を開け、俺は一人の少女に声を掛けた。

「まあ、どちらかと言えば好きじゃな」

べんちとやらに腰掛けたわしの隣に座った彼――七日ぶりに会う少年の問いに、わしは考えながら答える。

「あの場所に娯楽と呼べるモノはなかったからの。暇な時はぼーっと空を眺めておった」

実際あの箱庭は完成された世界で、故に面白さはどこにもなかった。予定調和の毎日が繰り返され、前日と全く変わらない一日がひたすらに続いているだけだった。

「…で、空の先が知りたくなったと」

「まあ有り体に言えば家出じゃの」

だからあの日、わしは逃げ出した。転移魔法で行ける最も遠い場所――あの砂漠の世界へと跳んだ。まさかそこで襲われたり庇われたりキレたりするとは思わなかったが。

「俺がぶっ倒れた後お前があいつ倒したんだろ？」

自分が意識を失った後のことを、確認するように尋ねてくる少年。…その口調、わかってて聞いておるじゃろ？

「はやてにでも聞いたのか？」

「いや消去法。飛べないヴィータじゃ論外だし」

「なるほどのう…」

確かにあの場で戦えるような余力が残っていたのはわし一人。考えなくともわかることか。

「箱庭には箱庭たる理由があるから存在する。あそこは檻であると同時に、ゆりかごでもあったのじゃ。わしら龍神――全生物の頂点に君臨する者、その王家の力を狙う輩は案外おっての。末娘とはいえわしもそこで一生を終えるはずじゃった」

生物、というこの世に在る存在の中で、龍とは生物にして生物にあらず。神格化され、奉り上げられ、その力のおこぼれに預かろうとする者はいつの世も存在する。そんな輩から守る為の箱庭だとわかってはいても、中にいる者からすれば空虚な庭園でしかなかった。

「で、家出して襲われかけた挙句ブチ切れした訳か」

「…お主は口が悪いのう」

身も蓋も無い締め方に呆れながらぼやくと、よく言われる、と苦笑が返って来た。…優しいくせに口が悪いのは無自覚の皮肉なのだろうか。

「怒りがトリガーとなって天照は使えたものの、あれはわしら一族の最奥に封じられた力。勝手に使った上末娘じゃし勘当されても仕方ないのう」

元々王家において末っ子とは微妙な存在。王位継承権を持っている訳でもないが、かといって無下には出来ない。今回もなんだかんだ言いながら結局は引き止めようとしてきたしの。

「じゃが姉上は…、逆に喜んで送り出してくれた。箱庭(ここ)ではない別の世界で、望むように生きていい、とな」

それに反発して飛び出そうとしたわしに、唯一味方してくれたのが姉上———王位継承権を持つ長女だった。元々わしのことを気にかけていたから、いっそ外に出て見聞を広めればいいと発言してくれたのだ。

「じゃからわしは…」

話を締めて立ち上がり、少年を正面から見据える。一陣の風が吹き抜けると同時———

「お主と共に行く」

―――その一言を、告げた。

「魔導師には使い魔や守護獣とやらがおるのじゃろ？ならわしがそれになればいい」

使い魔、または守護獣。魔導師を陰日向から支える存在。

―――今のわしの意志のカタチに、ピッタリと嵌まる未来のカタチ。

「…せっかく外に出れたのに、こんなアホのせいで一生を棒に振っていいのか？」

「自虐するでない。お主は確かにわしの命を救ったのじゃから」

そう。確かに危険だったし怒られても仕方ないが、彼がヴィータと自分の命を救った。その事実は揺るがないのだから。

「…俺達天城一族の使い魔契約はちょっと変わっててな…、ぶっちゃけ契約でもなんでもないんだ」

苦笑しながら立ち上がり、彼は契約について話し始める。その方法とは―――

「契約相手に何かを贈って…、感謝を表すと同時に自分のモノだって周りに宣言するんだ」

―――使い魔と呼ぶにはあまりにも優しい、温かな誓いだった。

「だから俺は…、これを渡す」

どこからともなく取り出した赤いリボンを、わしの髪に結ぶ少年。蝶結びをしてもなお、リボンの端が腰近くまで届く長いリボンだった。

「ん、バッチリ似合ってるな」

和服にピッタリだ、と笑う少年を見て、我知らず笑みが零れる。本当に…、よくわからない人間じゃの…。

「…ホント、お主は変わっておるのう」

「お前も似たり寄ったりだよ」

互いに苦笑を交わすと同時、表情を引き締める。贈り物はもらった。後は誓うだけ。

「…天城、ナツキだ」

「…ミサオじゃ」

今更と言えば今更過ぎる自己紹介を済ませ、互いに魔法陣を展開する。銀と赤が混じり合い、赤熱化した鋼のような色へと変わっていく。

「汝、我が命に応え共に戦い、大切な人を守る力となることを誓うか？」

「誓おう。龍神の名に懸けて」

問いかけの祝詞を上げる彼に、わしは己が血と想いに懸けて誓いを告げる。つまるところ、彼はこういう人間なのだ。誰かの為に全力で、己の全てを懸けられるお人好し。そんな危なっかしい彼を守る為、今ここで心からの想い（誓い）を述べる。

「…よろしくな、勘当家出娘」

「…こちらこそ、傲慢守護者」

魔力光の残滓に照らされて、月と星の光の下で。皮肉るように握手を交わし、わしらは主従の契りを結んだ。

———後日、主がなのはとフェイトだけでなくヴィータにまで丸一日泣き付かれ、埋め合わせとしてヴィータに大量のお菓子を作り、なのはとフェイトの二人とデートをすることになり丸三日潰されることになるのだが、それはまた別の話。

後編「守るということ」（後書き）

はい、これで全三編終了です。三日間ありがとうございました。
次は三期を書き始めますので、気長にお待ちください。

イカと戦士と水族館（前書き）

記念すべきクロス一作目です。
魔法少女リリカルなのは～片翼の天使の導いた世界～などでおなじみ、U・Tさんとクロスさせていただきました。FFとなのはのクロス作品で、クラウドとセフィロスをお借りしています。

休日に水族館に行くことになったナツキ、なのは、フェイトの三人。
そこに戦士とイカが現れて！？
結論：カオス注意

イカと戦士と水族館

「ふむ…。やはり残りのジュエルシードは海の中、か」

眼下に広がる広大な海を眺め、私は一人呟く。残りの欠片は六つ。私の力でやってやれないこともない、が…。

「無意味に力を消費する必要もあるまい」

どうせあの「人形」がやるだろう。私自身が動く意味などない。

「下見も済んだし帰…、っ！？」

次元の狭間への扉を開いた瞬間、それは起きた。海中に眠るジュエルシードが僅かに発現し、時空を捩曲げていく！！

「くっ…！！」

だが、既に狭間に半分以上体を潜らせていた私に抗う術はなく。

――――歪んだ時空へと、飲み込まれた。

「っ！？」

体に掛けられた毛布を跳ね退け、立ち上がる。まだ明け方なのか、周囲は暗闇と静寂に包まれていた。

「…今の気配は」

微かだが、間違いない。あいつ、セフィロスの気配だ。

「…また何かするつもりなのか」

警戒し過ぎて損することはない。そう思った俺は部屋を出た。この時間なら同居人の二人もまだ寝ているだろう。起こすのも忍びない。

「…フェンリル、頼む」

《Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ（勿論です）》

己のデバイスに話し掛け、バリアジャケットを装着。外へ飛び出すと同時、気配の方向、海目掛けて跳躍した。

「…これは」

宙に浮くそれに近付き、俺は首を傾げる。何やらマテリアと似たような力の波動を感じるが、どこかおかしなその存在。時空を僅かに歪ませて、七色に輝くトンネルのような穴。

「…触れない方が賢明か」

見るからに厄介な気配を漂わせているそれに、わざわざ自分から関わるつもりはない。が、セフィロスの気配がここで途絶えているのも事実で。

「……」

思案の後、俺はフェンリルを穴に突っ込んでみた。

《……》

互いに無言。そのまま何事もなく一分が経過。

「…どうしたものか」フェンリルを引き抜いてみるが、どこにも影響はないようだ。かといって人体に影響がないとは限らないし、このまま放置というのも寝覚めが悪い。

「……？」

思考に耽っていると、一瞬視界の隅で何かが光った。

「なっ！？」

例の渦が輝きを増し、俺を招き入れるかのように周囲の大気を吸い込み始めた！！

「くっ…！！」

慌てて退避しようとするもここは空。支えになるようなものなどあるはずもなく。

「うおおおお！！」

俺は渦の中へと吸い込まれた。

「…で、何故に俺はここにいる訳？」

俺は目の前の建物を見上げ、傍らの少女達に尋ねる。海辺に立てられたドーム状のそれには、海鳴市水族館という文字が掲げられている。

「えーと、リンディさんが福引きで、水族館の入場券を引き当てたんだけど」

「三人分で丁度いいから、お兄ちゃんも誘って行って来たら、って」

右側からなのはが、左側からフェイトが答える。その手はがっちり俺をホールドしていて、逃がさないと言わんばかりだ。

「いやまあいいんだけどさ…。せめてもうちょっと離れてくれ…」

二人は抱き着くようにして俺を捕まえていて、文字通り両手の花状態。そりゃまあ俺も男なので、嬉しくないと言えば嘘になるんだが、周囲の視線もグサグサと。

「…ダメ？」

「うっ」

フェイトの悲しげな声に、罪悪感という名のグングニルが突き刺さる。そんな目で可愛い妹に聞かれたら、

「…わかったよ」

ダメなんて言えない訳で。

「…フェイトちゃんはいいのに、私はダメなの？」

それを見越したかのように、なのはが上目遣いで尋ねてくる。…お前ら口裏合わせてるんじゃないだろうな。

「…わかったって。ただせめて手を繋ぐくらいで妥協してくれ…」

溜め息と共に、俺はせめてもの反抗をとる。せっかくの休日なのに、無駄にストレスは掛けたくない。

「「…うんっ！！」」

ぱあっと顔を輝かせ、二人揃って手を握る。三人でこういった所に出掛ける機会なんてそうそうない。なんだかんだ言って、俺も結構楽しみなのだ。

「んじゃ、行きますかね」

二人を引っ張り、俺は入り口目掛けて歩き出した。

世の中は複雑怪奇。たった一つの出来事が、様々な波乱を呼ぶ。

「おーい、なんか巨大で奇妙なイカが打ち上げられてるぞー」

「丁度いい。今のうちの展示に追加しよう」

「なんだ…、ここは…。海鳴市に似ているが…。何か違和感が…」

「ところでパンフは？」

「うん、あるよ。なんか世界のイカ展示をやってるみたい」

「イカ…、初めて見る…」

それぞれの思惑を一顧だにせず、
———奇妙な休日が、幕を開ける。

「「うわぁ…！！」」

入ると同時、目に入って来たのは色とりどりにライトアップされた、
———くらげだった。

「……えー」

子供二人は素直に喜んでいるが、俺はそうでもない。普通水族館って、始めは綺麗な小魚とかから始まるものじゃなかったっけ？

（…いいや）

まあ、世界が違えば水族館も異なるのだろう。…多分。そして「お前も子供だろ」とか言ったそこのおまえら、後で校舎裏な。

「「綺麗…」」

二人はと言うと、仲良くフロア中を巡りながら、くらげ達を見て感激している。…フェイトはまだわかるとして、なのはは別に初めてじゃないんじゃ…。

「……」

アレか。これが「気にしたら負け」ってヤツか。くらげに感激している時点で何かおかしい気がするが、ここはそういう時空なんだ、きっと。

「ナツキ君！！」

「お兄ちゃん！！」

と、訳のわからん思考に耽っていると、二人がキラキラと目を輝かせて、

「「この子家で飼いたい！！」」

「待て」

何を言っているのだこの二人は。くらげが飼える訳…。

『このくらげは売店で販売されています』

「なんでやねん！！」

水槽の説明欄にでかでかと書かれた一文に、思わず関西弁で突っ込む。

「「……じー」」

二人は尚も、期待の眼差しを送ってくる。マジで飼う気かおまえら。

「……」

仕方ないので俺は、説明欄の一カ所を指差す。

『このくらげは毒を持っています』

「何故売ったし！？」

「「えええええ！？」」

あまりにも理不尽過ぎて俺自身もツッコミを入れてしまう。ここの職員絶対頭沸いてるだろ！？

「「……くすん」」

二人はというと、悲しげにくらげを見つめている。誰であろうと陥落させる二人の涙目も、くらげ相手じゃ効果はない。あっても困るけど。

「…ぬいぐるみなら買ってやるから、元気出せ」

仕方ないんだ。涙目の二人を見ていると俺の精神力が某手乗りモンスターでいう猛毒＋火傷＋呪い並の勢いで減っていくんだ。だからちょっとくらいなら甘やかしても仕方ないんだ。

「「……！！」」

二人はぱあっと顔を輝かせ、再び俺の手を引っ張る。

「行こうよナツキ君！！まだまだ先は長いんだよ！！」

「私、イルカとかシャチとかイッカクが見たい！！」

…元気になってくれたのはいいんだが。

「いやイッカクいないからな！？」

さすがに北極圏の珍獣はいません。…多分。

「…妙だな」

ザッと近辺を見回した俺は、その違和感を強めた。確かにここは海鳴市なのだが、どこかがおかしい。何が、とは言えないが、それでも引っ掛かるのだ。

「…あの穴か」

原因特定。というかそれしかない。パラレルワールド、という言葉があるくらいだ。あの歪んだ穴を通ったことで、どこか違う世界に来てしまったのかもしれない。それならあの少女と住んでいたビルが埃を被り、大分使われていないことが一目でわかる有様だったことも頷ける。

「…興味ないな」

が、ここがどこだろうと構わない。重要なことは二つだけ。一つ目は早急に元の世界に戻ること。二つ目は、

「セフィロス、だな…」

セフィロス。俺の宿敵。長い刀を携えた、片翼の天使。

「…こっちか」

僅かな気配をたどり、俺はそのドーム状の建物へと入ることにした。

「…はぁ」

あらかた回り終えた俺達は、売店に隣接するフードコートにいた。ここの職員頭は沸いているが、飯だけはマトモで普通に美味かった。

「わーい、イルカさん♪」

なのははニコニコとイルカのぬいぐるみを眺めていて、

「……」

フェイトは何故か売っていたイッカクのぬいぐるみを、無言でぎゅうっと抱きしめている。

「…なにこれ」

そして俺の手元には、お土産の菓子折りが数個。…俺、枯れてんの？小学生がご近所付き合い気にするってアウト？

「ナツキ君も何か買えばいいのに…」

イルカをリュックに仕舞いながら、なのはが声を掛けてくる。

「別に欲しいものなんてないしな…」

強いて言うならマトモな職員くらいか。

「……」

と、立ち上がったフェイトがアイコンタクト。なのは共々俺を引きずり始めた。え、何？拉致？どこのマフィア？

「何もないと悲しいから…」

「私達で見繕ってあげる」

二人はニコニコ微笑みながら、俺を売店へと押し込んでいく。…仕方ない、か。

「はいはいわかったって。ただし代金は俺持ちだからな」

「「え！？」」

心を読まれたかのように二人の動きが止まる。…やっぱり。

「そんなこったろうと思ったよ…」

いやまあ確かに二人のぬいぐるみで樋口さんがお亡くなりになりましたが。それはむしろ年上や兄として当然の行動な訳で。

「…二人は選ぶだけ。いいな？」

「はーい」

「むー…」

なのはは苦笑しながら、フェイトは唸りながらも頷く。さて、どうなるやら。

「水族館、か…」

セフィロスの気配を追ってきた結果、入った建物はそれだった。水槽の中にいるのは綺麗にライトアップされた、

――――くらげ。

「…趣味が悪い」

セフィロスくらげフェチ疑惑を胸に、俺は目を閉じ、気配を探る。

「…向こうか」

あんまり時間を掛ける訳にもいかない。俺はアホな思考を断ち切り駆け出した。

「…やれやれ」

携帯に付けられた水色のイルカのキーホルダーを見て、思わず苦笑する。なのはやフェイトの携帯にも、ピンクと黄色のイルカがくっついていることだろう。
あの後売店で三色のキーホルダーを見付けたなのはがレジにダッシュ、俺がフェイトの足止めという名の抱き着きを喰らっている間にお会計。まんまとやられてしまった訳だ。

「お揃いだね、ナツキ君♪」

「…えへへ」

が、満面の笑顔を見せる二人に言い返す気力もなく。

「ったく…。ほら、さっさと行こうぜ」

苦笑と共に促し、一際広いホールの中へ踏み込む。ここはイベント用の展示ホールで、度々何かしらをやっているらしい。確か今回のイベントは、

「世界のイカだったっけ…、っ！？」

視界を霞めた、ユキのものによく似た銀髪に、思わず振り返る。そこにいたのは、

———両手両足を縛られ、目隠しをされ、水槽に展示された、銀髪の青年。

「……はぁ？」

あまりにもぶっ飛んだ光景に思わず反応が遅れた。ユキも大概な実験をしていたが、ここまでシュールな光景は見たことがない。

「わあ…、凄い…！！」

とてとてとその水槽に近寄ったフェイトが、目をキラキラさせている。…って！？

「いや待て。待て待て待て。フェイト、何を言っている」

思わずフェイトの肩を掴みこちらに向かせ、目を覗き込む。

「…あう」

が、フェイトは顔を真っ赤にして視線を逸らしてしまった。なーんでーやねーん。

『…アクセル。お前にはアレが何に見える？』

思わず不安に駆られた俺は、恐る恐る胸元の相棒に尋ねてみる。

『Ｔｈｅ ｙｏｕｎｇ ｐｅｒｓｏｎ ｗｉｔｈ ｔｈｅ ｓｉｌｖｅｒｙ ｈａｉｒ ｉｓ ｓｅｅｎ（銀髪の青年に見えるな）』

が、返って来た答えは俺と同じものだった。とりあえず一安心。

『…レイジングハート、バルディッシュ、おまえらは？』

『Ｉ ｆｅｅｌ ａｎ ｉｎｔｅｎｓｅ ｓｅｎｓｅ ｏｆ ｉｎｃｏｍｐａｔｉｂｉｌｉｔｙ ｔｈｏｕｇｈ ａ ｈｕｇｅ ｓｑｕｉｄ ｓｅｅｓ ｉｔ（巨大なイカに見えますが、何故か激しい違和感を感じます）』

『Ｓｉｍｉｌａｒｌｙ（同じく）』

念の為聞いてみたところ、なのはとフェイトの胸元に飾られた、赤い宝石と黄色のペンダントがすぐに答えを返した。

（幻影魔法か…？それとも対象を取り込む結界魔法…？）

頭の中で高速で答えを弾き出すが、どちらも違う気がする。それに…、

「…ナツキ君？」

と、なのはに声を掛けられた俺は、フェイトの肩を掴んだままだったことに気付いた。

「～～～っ」

恐る恐る視線を向けると、フェイトは顔を真っ赤にし、頭から煙を出していた。…いやまあ比喩だが。

「あ、ゴメン」

慌てて肩を離し、むくれるなのはを宥めに掛かる。

『魔力反応はなし…、か』

『Ｉｔ　ｉｓ　ａｌｗａｙｓ　ａ　ｓｔｒｅｅｔ（いつも通りだな）』

いつも通り。つまり俺達以外の反応はないということ。ここは…、一先ず静観か。

『今のところは問題ないし、無視しておこう』

現実逃避、とも言うが。

『…Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（…了解）』

アクセルもこの訳のわからない現象に呆れたのか、疲れたように同意する。

「お、そろそろイルカのショーの時間だ。早く行こうぜ」

とりあえず二人の気を逸らし、早急にこの場から離れることにした。

「…なんだコレは」

気配を追ってきた俺の前には、人生史上トップ３に入る珍妙な光景が広がっていた。英雄と呼ばれた男が、俺を何度となく苦しめた銀髪の宿敵が、

―――水槽に展示されていた。

「……」

思わず頭を抱えて座り込む。なんだこれは。何かのドッキリか。

「…セフィロス？」

念の為セフィロス、もとい「世界で最も珍妙なイカ」に声を掛けてみる。…当然だが、無反応。

「…世界で最も珍妙なイカ、聞こえているなら反応しろ」

呼び方を変えてみるも、当然無反応。

「…帰るか」

なんだか何もかもがどうでもよくなり始めた。フェンリルに至ってはさっきから一言も喋っていない。

「仕方ない、適当に探し回、っ！？」

不穏な気配を感じ、背後を振り返ると。

「ふフふふＨＵＨＵフフ…」

何やらいけないスイッチが入ったイカが水槽を切り裂き、どこぞの幽霊の如くのそのそと這い出てくるところだった。

「…面倒な」

溜め息をつきながら、俺は油断なくイカを見据えた。

「あ、見て見てママ、おっきなイカさんだー」

ピキッ。

「うっわなんだよこのイカキモー」

ビシリ。

「変わったイカもおるもんじゃのう…」

ブチッ。

「…世界で最も珍妙なイカ、聞こえているなら反応しろ」

限界突破。正宗で水槽を切り裂き、ズルズルと這い出る。

（私は…、私は…！！）

「イカではなあい！！私の名は…」

私が立ち上がりながら天を仰ぎ、大声で名乗りを上げようとした瞬間、

「黙れイカ」

「ぷげらっ！！」

顔面に蹴りを食らい、壁際まで吹き飛ばされた。

「ったく、めんどいな…」

華麗にローリングソバットを叩き込み、地面にスタッと降り立つ。床は水浸しで足場は最悪。砲撃型のなのはが恋しいが、そうも言っていられない。

あの後イルカのショーを見る為に席取りをしていたのだが、不穏な気配を感じて俺だけ戻ってきたのだ。心配性二人を待たせたままでは心臓に悪いし、せっかくの休日なのだから二人にはゆっくりして貰いたい。

「さっさと決めるぞ…、アクセル！！」

《Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ，Ｓｅｔ　ｕｐ》

俺の声に答え、アクセルが刀に変化。握ると同時、漆黒のロングコートを身に纏う。

「っ！？後ろだ！！」

「！？」

警告の声に振り返ると同時、銀の刃が俺の目の前に迫ってきた！！

（間に合わ…）

「はあっ！！」

「ぬるぽっ！？」

が、その刃の持ち主は、大剣の一撃により再び吹き飛ばされた。

「…まさか、この世界にも魔導師がいるとはな」

俺は大剣を担ぎ、背後の少年に振り返った。少年はぽかんとした後、視線を鋭くする。

「助けてくれたことはありがたいが…、あんた、何者だ」

少年の瞳に浮かぶのは警戒の色。まあ、無理もないか。

「通りすがりの、ただの戦士さ」

大剣を構え直し、イカに向き直る。

「少しばかりあのイカに因縁があってな…」

「…そーかい」

肩を竦めた少年は、どこから取り出したのか二本目の刀を構える。
「俺の連れに会わせたくないんでね。戦力は多くて困ることはない。協力してやるよ」
「…助かる」
ニヤリと不敵に微笑む少年に、素直に礼を述べる。いくらイカ化しているとはいえ、一人で戦って確実に勝つのは難しいだろう。それにこの少年、隠してはいるが強力な力を秘めている。俺と互角か、下手すれば…、
「…お前、名前は？」
と、そんな思考と共に傍らの黒い少年を見下ろしていると、不意にそんな質問を放ってきた。
「…クラウドだ」
対し俺は短く答える。違う世界で不用意に関わっても、情が生まれて辛いだけだ。
「OK、俺はナツキ。通りすがりのシスコンだ。よろしく」
再びニヤリと不敵な笑みを浮かべた少年、ナツキは体を沈め、イカ目掛けて飛び出した。

「さっさと決めますか、ねっ！！」
加速した俺はイカの正面に陣取り、全力で二刀を振り下ろす。
「ふっ！！」
が、イカは長い刀を器用に操り、俺の攻撃を受け止めた。
「おらよっ！！」
弾きながらグラビティアクセルで背後に回り込み、イカ目掛けて連続で斬撃を放つ。
「甘いわぁ！！」
だがイカは尚も軽々と受け流す。このイカ…！！
「はああっ！！」
が、クラウドが上方から奇襲を仕掛け、イカが距離を取り、状況は仕切り直しに。
「おい、そこの…、えーと…、めんどくせえ、おいイカ」
イカに呼び掛けようとするも、適切な呼び名がないのでイカと呼ぶ。
「こっちは別にやり合うつもりはないんだが…、おとなしく引き下がってくんねぇ？」
数回打ち合っただけでわかったが、このイカかなり強い。レールガ

ンを当てれば倒せないこともないだろうが、周囲に被害が及ぶし、何よりぶっちゃけめんどい。

「…イカ、だと…？」

が、イカは長い銀髪の隙間からこちらを鋭く見据えてきた。普通なら怖いんだろうけど、頭に海藻が乗ってるので逆に笑える。

「イカで…、イカで何が悪い！！」

「逆ギレかよっ！？」

ツッコミと同時、イカが突っ込んできた！！

「八刀一閃！！」

「ちいっ！！」

クラウドが割って入り、巨大な大剣で八連続の斬撃を受け止める。

「蜃気一閃！！」

その隙を見逃す俺ではない。腰溜めに構えた二刀を抜刀し、黒い斬撃を飛ばす！！

「ふんっ！！」

が、イカはすぐにバックステップ。とっさの判断力もあるってことか。イカだけど。…ん？

「おいイカ」

ふと先程の出来事に引っ掛かった俺は、

「お前実はタコか」

その疑問を告げた。

「……は？」

ナツキの唐突な言葉に、思わず聞き返す。あいつはイカでありタコでは…。

「いやだってさ。イカならなんで十刀一閃にしないの？八じゃタコじゃん」

「……おお」

思わず手をポンと打つ。なるほど確かに。イカの足は十本だが、イカの放った斬撃は八連撃。これではイカではなくタコと言われても仕方ない。

「ふふふ…」

だがイカ、もといタコは不気味に微笑み、

「私は…、イカだあああああ！！」

自分がイカだと全力で肯定した。

「…クラウド、帰っていいか」

ナツキが完全に呆れた目を俺に向け、疲れたように呟く。

「待て。俺みたいなノーマルな人種にあんな奴の相手は無理だ」

ただでさえ規格外なイカなのに、あんなハイな状態ではどうなるかわかったものではない。あ、なんかイカから翼生えた。

「俺だってノーマルだ」

「いやさっき自分でシスコンと言ったのはお前だろ」

全力で突っ込んだ。自分で言っておいて否定するのかこのシスコン。

「俺がシスコンなのは妹が可愛いからなのであって結論俺はノーマルだ」

「…何が違うんだ」

同じことじゃないのか。

「妹が俺の妹であるからこそシスコンなんだ。妹でも妹じゃなくても溺愛してたと思うぞ？」

「…訳がわからん」

考えても無駄だと悟り、再び大剣を構える。

「ま、サクッとやろうぜサクッと」

「ああ…！！」

ナツキに答え、俺は再びイカを見据えた。

「アクセル」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｓａｂｅｒ》

俺の声に答え、刃が黒くコーティングされる。

「トドメは任せた。しっかり頼むぞ」

クラウドにそれだけ言い残し、俺はイカ目掛けて駆け出した。

「ったく…、ふざけんなよこのイカ」

毒づきながら加速し、イライラをぶつけるように二刀を叩き込む。

「ふはは！！イカナメんなイカぁ！！」

このアホイカのせいで休日は台なし。しかもユキと同じ銀髪。加えて…、

「黒服で刀使いとか…、俺と被るだろうがぁ！！」

俺の存在意義に関わる重要な問題である。しかもイカだし。

「ふはははは！！イカに八つ当たりか！！」

「黙れイカ！！おとなしく捌かれろ！！」

もはやガキレベルの口喧嘩をしながら、俺達は得物をぶつけ合う。

「この…」

《Ｌｉｎｅａｒ　Ｚａｍｂｅｒ》

鞘に収めた刀を構え、低姿勢で加速する。

「八刀…」

イカも応じて刀を構える。構えまで似てませんかコレ。被害妄想かもだけど。

「クソイカあああああっ！！」

「いっすぅえええん！！」

二人揃って、見るに堪えない醜いバカの喧嘩を続行する。

…俺、何してんだろうな？

「……」

俺は目の前で繰り広げられる戦闘、いや、もはやただの喧嘩と化したそれを見守る。被害がデカい分喧嘩なんて可愛いレベルじゃないかもしれんが。

「…フェンリル」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

俺の声に従い、カートリッジがロードされる。刃を覆うのは、闘気という名の蒼き炎。

「一撃で、決める」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解です）》

大剣を担ぎ、イカを見据える。こちらの準備は整った。後は、機を待つだけ。

「っ！！アクセル！！」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｆａｌｌ》

ナツキがそれを確認したのか、魔法を発動した。場の重力が急激に増加し、イカが地に膝をつく。

「はあああああっ！！」

瞬間、俺は地を蹴った。

「狼牙一閃っ！！」

蒼き炎を爆発的に増した大剣、フェンリルをイカ目掛けて全力で振り下ろす！！

「イカナメんなあああ！！」

「なっ！？」

だが、イカもさるもの。とっさに練り上げた黒い力を、迎え撃つように叩き込んできた！！

「う、おお…」

フェンリルが凄い勢いでカートリッジをロードしていくが、徐々に押され始める。このままじゃ押し切られ、

「沈めクソイカ」

《Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｚａｍｂｅｒ》

だが、それは杞憂に終わった。背後に回ったナツキが、肥大化した黒い刃をイカ目掛けて振り下ろした！！

「イカあああああ！！」

「死にさらせえええええ！！」

時間が歪む。空間が壊れる。次元を切り裂く程のエネルギーが渦巻き始める。

（まさか…、ナツキは星の力を！？）

だとすれば、イカの力とぶつかり合ったら…！！

「ナツキ、ストッ…」

掛けようとした声は、爆音に遮られ。俺達は、爆発に飲み込まれた。

「うっわ、ひでぇなこりゃ」

ナツキの声に俺は体を起こし、周囲を見回す。イカに攻撃を叩き込んだ地点はクレーターのように刈れ、床は破片で傷だらけだ。

――そして、その中心に浮かぶ、虹色に輝く渦。

「あのイカ空間制御出来たのかよ。道理で被害がデカい訳だ」

「空間制御…？」

星の力ではないのか…？

「んー、正確にはちょっと違うか。重力や磁力みたいな、星に関わる力、とでも言ったところかな」

「ナツキも…、星の力を？」

呼び方は違えど、本質は同じモノらしい。尋ねた俺に、ナツキが振り返る。

「まぁね。クセがあるけど強いよ、コレ」

ナツキが差し出した右手には、イカが作り出すブラックマテリアのようなものが乗っていた。

（これが…、星の力…）

イカのような存在ではなく、目の前のような少年がその力を持てば、きっと世を正しく導く力となるだろう。

「…ナツキ、一緒に来ないか？」

だからだろうか。俺はナツキに手を差し出していた。きっとこの少年なら、あの少女が前へ進む鍵となるはず。そんな確信めいた予感があった。

「…興味ないね」

だが、驚いたように振り向いた彼は、苦笑と共にそう答えた。

「ナツキくーん」

「お兄ちゃーん」

と、土煙の向こうから、二人の少女の声が聞こえる。ナツキの言っていた連れだろうか。

「言ったろ？連れがいるって。あいつらを置いていく訳にはいかないよ」

「…そうか」

悪いな、と笑うナツキに俺も苦笑する。二人の声が聞こえた瞬間、彼の声が和らいだのを感じた俺は、すんなりと理解した。彼はただ、守る意志を貫いているだけなのだと。

「…帰るのか」

「…ああ」

立ち上がり渦目掛けて歩き出した俺に、少年が声を掛けてくる。本来交わるハズのなかった二つの世界。今回は、それがたまたま交わっただけ。「この」海鳴市という舞台に、求められているのは彼だ。

「…しっかりやれよ」

「…お前もな」

俺の言葉にしっかりと答え、彼は背を向ける。俺は俺の、彼は彼の、世界（げんじつ）を生きる。ただ、それだけ。

「お兄ちゃん、大丈夫！？」

「うわボロボロ！！また一人で無茶して！！」

彼の大切な人達（守るべきモノ）の声を背に、

———俺は、渦へ飛び込んだ。

「…なるほどね、次元漂流者か」

「次元漂流者？」

報告を聞き終えたクロノの呟きに、俺はおうむ返しに聞き返す。

「僕ら時空管理局ですらも管理出来ない、別の次元世界の存在。それが次元漂流者だ。前例こそ少ないが、強力な力を持った者が多いらしい」

「なるほど…」

確かにあいつ、クラウドの力は目を見張るものがあった。相手があのイカでなければ圧勝していただろうし、俺でも勝てるかどうかわからない。

「まあ、そういうことなら上も大目に見てくれる。被害を最小限に抑えた訳だし、説得は僕に任せておいて」

「助かるよ」

クロノが立ち上がりながらメモをぺらぺらとめくる。彼はこれからリンディ艦長と共に今回の件事後処理に回るらしく、俺達は蚊帳の外なのだ。

「それじゃ、留守番と子守は任せたよ」

「…俺とあいつら一つしか変わらないんだけどなぁ」

苦笑と共に答えを返し、クロノを見送ってから部屋に戻る。

「あ、ナツキ君。お帰り」

「お帰り、お兄ちゃん」

そこには、パジャマを着込んで準備万端と言わんばかりの二人の少女が待ち構えていた。今日の件を二人に黙って解決した結果心配を掛けてしまい、それを理由に「一緒に寝ること」を言い付けられたという訳だ。引っ付かれると寝づらいんだけどなぁ…。十中八九腕枕になるから腕疲れるし。

「ほらほら、早く寝よう」

「三人で…、一緒…」

…まぁ、こんな嬉しそうな顔をする二人に、嫌と言える訳も言うつもりもなく。

「はいはい、わかったから落ち着けって」

部屋の電気を消し、布団に入り込む。なのはが右、フェイトが左。いつものポジションに仲良く収まる。

「んじゃ、おやすみー」

「おやすみなさーい」

「おやすみ…」

なあ、クラウド。こんな俺でも二人の喜びになれるなら、俺は何だってするつもりだ。お前は、どうなんだ？守りたいモノ、あるか？

「…ここは」

辺りを見回す。眼下に海、上空に曇天。あっちに飛ぶ前と同じ場所のようだ。

「…ナツキ、か」

消えてゆく渦を見守りながら、あの少年のことを思い出す。飄々として不敵で、底が知れないふざけた態度の少年。

『あいつらを置いていく訳にはいかないよ』

だが、心の奥に強いモノを秘めた、楽園（ゆめ）の守り手。

「俺も、覚悟を決めたよ」

例えこの身が砕けようとも、あの少女を守る。それが、俺の生きる現実（みち）。俺自身が決めた、クラウド・ストライフの生き方。

「…帰るぞ、フェンリル」

《Ｙｅｓ，Ｓｉｒ（了解）》

口元が緩むのを自覚しながら、俺はあの少女が眠るビルへと飛び立った。

「…はっ！！」

身を起こすと同時、体に纏わり付く不快な感触。水を吸った衣服が、肌に張り付いているのだと理解出来た。

「私は…、落ちたのか…」

上空に広がる曇天、私が浸かっている海水、ジュエルシードの気配が、それが正解だと告げている。

「…しかし、奇妙な夢を見た気がする」

何やらイカだのタコだの呼ばれた気がするが、何かの間違いだろう。この私を倒せる者など、そうそういる訳がない。

「…そういえば」

夢の中であの人形と、星の力を操る少年に完敗したような気がするが、きっと気のせいだ。まだあの人形は、強さの意味を理解していないのだから。

「…帰るか」

次元の狭間を開き、時の庭園へと向かう。とりあえずは…、

「…服を乾かさねばな」

替えの服などあっただろうか、などと考えながら、私は海の上から姿を消した。

イカと戦士と水族館（後書き）

いやー、のっけから飛ばし過ぎた感が否めないw
後書き兼残念会は別枠で作ってありますのでそちらをどうぞ。

第一回残念会（前書き）

ええ、それ以外になんと言えばいいのか（そげぶ

第一回残念会

ナ「ナツキと！！」

イ「イカの！！」

二人「「ロリコン座談k」」

ク「待てええええ！！」

ナ「いや言っといてなんだけど何この出落ち。作者は何をさせたいんだマジで」

ク「俺が知るか。ていうかイカどうしたイカ」

ナ「何か「私は星ではなく海に還る！！」とかほざいてバタフライしながら去って行ったぞ」

ク「…どこぞの動画のように吹っ切れたか？」

ナ「いやまあ本編であそこまでブレイクした以上クロス(こっち)はもう別物でいいだろ」

ク「カリスマのカケラもないしな」

ナ「えーんじゃまず解説？でも」

ク「そもそも事の発端は、そっちの作者だったか」

ナ「ああ。何か某活動報告で「デート場所キボンヌ」って言った結果、そちらの作者ことU・Tさんが「水族館」と提供してくれて」

ク「こっちが悪乗りした結果イカが展示されて」

ナ「んでこっちのバカも付け上がってそこにクロスさせた一発ネタ書いて」

ク「「あれ？行けるんじゃね？」とこれを書きはじめた訳だな」

ナ「…なんだ、いつも通りか」

ク「…全くもってその通りだな」

ナ「はい、基本うちのバカ作者はこんなノリで生きてます」

ク「こちらも似たようなモノだが…、これが類友か」

イ「イヤー類友コワーイ」

二人「「イカは黙れ」」

イ「そげぶっ！？」

ナ「まあ、そんなノリで始めたこの「イカと戦士と水族館」、うちのバカが一日で書き上げた」

ク「アナザーが完結したばかりなのにご苦労様だな」

ナ「おかげで関節炎一歩手前の毎日だがな」

ク「…休む気は？」

ナ「この座談会とアナザーの続編を書いている時点でわかると思うが」

ク「…なんだ、アホか」

ナ「ああ、ただのアホだ。それ以外の何者でもない」

ク「なのに何故か神格化されているのが悩みの種だとか」

ナ「ただのロリコンなのにな…。ツイッター見てみろ。フェイトへの愛しか叫んでないぞ」

ク「…うわあ」

ナ「あのクラウドに「うわあ」と言われた時点で読者様にも想像がついただろう。勇気のある者やフォローしたいという者は作者名でググるか作者のページへ」

ク「宣伝するなよ」

ナ「あれです、創造主には逆らえｎ」

ク「待て」

ナ「実際ネタがないからgd gd喋ってるだけなんだけどね」

ク「うわーあっさりネタバラした」

ナ「てか何よタイトル。思いっ切り某試召戦争じゃん」

ク「「ふっと思い浮かんだ反省はしていない」とカンペがきたぞ」

ナ「おkレールガンで塵にしてやる」

ク「待て。このまま何のオチもつけずに終w」

ナ「マジで終わらせる気だったなこの作者」

ク「さすがというか呆れるというか」

ナ「現実ではチキンなのにこういう時ははっちゃけるからな」

ク「つまりネト充か」

ロリコン「いやロリコンだ」

ナ「引っ込め」

ロ「サーセン」

ク「しかし俺とイカの出番少なかったな」

ナ「設定がややこしくなるからなのは達と絡ませられなくてこうなったらしいが…、いくら何でも投げ槍過ぎだろ。某不死の少女のテーマ曲みたいに月まで届かせるつもりか」

ク「スマン、言っている意味がわからない」

ナ「まあともあれこんな山なし谷なしオチなしのクロスでしたが、いかがだったでしょうか」

ク「どちらの作者も絶賛募集中なので、申請やらは気軽に頼む」

イ「以上、カオスな座談会でした」

二人「「イカ滅びろっ！！」」

イ「めるぽっ！？」

ロリコン「え、何これ。いいのこれで？」

ここからU．Tさんのターン

？「はーいども、駄文作者のU，Tでーす」

クラウド「今回はクロスしてくれて本当にすまなかった。
っておい作者。何故表記が？？」

?「そりゃオメー決まってんだろ。アレだよアレ。毎度毎度馬鹿馬鹿扱いされる妖精の如く、駄文駄文しか書けない俺にぴったりのあだ名だよ」

クラウド「スマン。言っている事がさっぱり分からん」

イカ「だったら紅○郷からプレイし直して来い！だがおぜう様とP○D長は私の嫁だからな？」

クラウド「・・・・すっこんでろ」

?「ともかく、今回は本当に有難う御座いました！！
凄く嬉しかったです！！」

クラウド「あの時作者が『水族館』と書かなければ・・・・こんな事にはならなかったものを・・・・」

イカ「いやしかし・・・・ゆかりんも捨て難いな、うん。いやでも霊夢も・・・」

クラウド「いい加減黙れ」

?「では♪」

第一回残念会（後書き）

※この作者はカオスとノリで出来ています

こんなgdgdな上カオス極まりなくてもクロスしてくださる方、絶賛募集中です。

基本的にロリコンことときょーすけは拒みません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3288n/

魔法少女リリカルなのはAnother　カオスなおもちゃ箱

2011年4月22日17時14分発行